

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

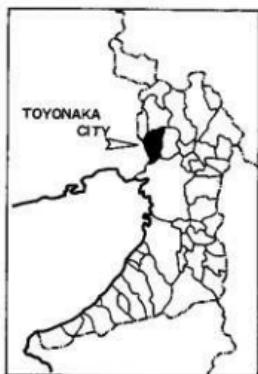
1986年度

1987年3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1986年度



1987年3月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、縁なす千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野に広がり、恵まれた自然と生活の他として栄えて参りました。

この報告書は、昭和61年度事業として団並びに大阪府の補助を受け、豊中市教育委員会が実施した、本町遺跡、新免遺跡の調査に関するものであります。各遺跡の調査結果については、以下に報告しているとおりであります。様々な形で古代豊中の姿が明らかにされました。

現代に生きる私達は、これら先人たちの足跡に思いを寄せるとともに、文化遺産を後世に伝えていくことの責務について、このたび豊中市が市制施行50周年という歴史的節目をむかえたことでもあり、あらためて考えたいものであります。

なお、調査の実施にあたっては、諸先生方に多くのご指導を賜り、また土地所有者、近隣住民の皆様には、文化財の重要性をご理解いただくなど多大なご協力を賜りました。又、文化庁、大阪府教育委員会並びに関係機関には格別のご指導とご配慮をいただきました。こうした多くの方々のご支援により、豊中市の文化財保護行政がより一層推進できることに対し、皆様方に厚くお礼申しあげます。

昭和62年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 湯元英世

## 例　　言

1. 本書は、豊中市教育委員会が昭和61年度国庫補助事業（総額4,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、新免遺跡、本町遺跡について実施した。昭和61年1月28日～昭和62年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行った。
3. 本書は、調査担当者を中心に全員で作成し、各報告の例言にその文責を明らかにした。全体の編集は山元建が担当し、遺物写真撮影は柳本照男が行った。
4. 整理作業は、調査担当者の指導のもとで、今井直美（大手前女子大学）、奥野豊子（関西大学）、酒井泰子の協力を得た。
5. 調査の進行にあたって、豊中市文化財保護委員藤沢一夫氏・都出比呂志氏、大阪府教育委員会文化財保護課堀江門也氏より御指導、御助言をいただいた事に対して深く感謝いたします。
6. 各調査地の土地所有者及び近隣住民の方々には、文化財保護並びに調査に対して深く御理解をいただいた事について、各報告の例言に明記するとともに、深く感謝いたします。

## 目　　次

### 周辺の遺跡

I.	新免遺跡 (第15～18次調査) .....	1
II.	本町遺跡 (第3次調査) .....	55

	遺跡名	調査地	調査面積	調査担当者	調査期間
I	13 新免遺跡 15次	玉井町2丁目14-20	63m <sup>2</sup>	柳本 照男	昭和61年5月28日～6月21日
I	13 16次	玉井町3丁目10-8	75m <sup>2</sup>	服部 雄志	昭和61年7月18日～8月12日
I	13 17次	玉井町3丁目3-24	93m <sup>2</sup>	服部 雄志	昭和61年9月1日～9月27日
I	13 18次	玉井町3丁目11-21	205m <sup>2</sup>	柳本 照男	昭和61年12月10日～62年1月16日
II	9 本町遺跡 3次	本町3丁目13-38	47m <sup>2</sup>	柳本 照男	昭和61年4月30日～5月17日

※遺跡名の番号は、周辺遺跡分布図と対応する。



1. 待兼山古墳 2. 黒池北遺跡（宮の前遺跡） 3. 黒池東遺跡 4. 待兼山遺跡  
 5. 桜原遺跡 6. 桜井谷古窯跡群 7. 黒池西遺跡 8. 南刀根山遺跡  
 9. 本町遺跡 10. 新免宮山古墳群 11. 金寺山庵寺跡 12. 荘輪遺跡  
 13. 新免遺跡 14. 山ノ上遺跡 15. 梅塚古墳 16. 塔名寺跡  
 17. 口酒井遺跡 18. 田能遺跡 19. 真田西遺跡 20. 駿部遺跡  
 21. 桜塚古墳群 22. 小石塚古墳 23. 大石塚古墳 24. 大塚古墳  
 25. 鶴獣子塚古墳 26. 南天平塚古墳 27. 真田遺跡 28. 曾根遺跡  
 29. 城山遺跡 30. 薩摩遺跡 31. 小曾根遺跡 32. 北条遺跡  
 33. 猪人遺跡 34. 豊島北遺跡 35. 標榜遺跡 36. 楼堂の前遺跡  
 37. 利倉遺跡 38. 利倉西遺跡 39. 上津島遺跡 40. 上津島南遺跡  
 41. 真田遺跡 42. 宮内遺跡 43. 岛江遺跡 44. 聰法寺遺跡  
 45. 若王寺跡 46. 下坂部遺跡 47. 開神山古墳

## 周辺の遺跡

新免遺跡、本町遺跡の所在する豊中市は北部に千里丘陵、中央部に豊中台地、西部・南部に西摂平野と比較的变化に富む地勢を呈しており、数多くの遺跡が点在する。

旧石器時代の遺跡は、螢池西遺跡、柴原遺跡でナイフ形石器の出土が知られる程度であるが、縄文時代には、野畑遺跡（中期末～後期）、野畑春日町遺跡（中期初頭、晚期後半）などの遺跡が千里川流域を中心に点在し、山の幸、川の幸を求めて生きた人々の姿をうかがい知ることができる。

弥生時代になると、水稻耕作の進展に伴って猪名川流域あるいは豊中台地の縁辺部を中心とする遺跡が急増し、宮ノ前遺跡（中期）、螢池西遺跡（中・後期）、箕輪遺跡（中期）、勝部遺跡（前・中期）、小曾根遺跡（前・中期）、曾根遺跡、穂積遺跡、利倉西遺跡（以上後期）などがある。また、中桜塚の原田神社の境内からは外縁付鉢式の銅鐸が2個出土している。

農耕文化の発達は、生活の安定をもたらすとともに社会に持つ者と持たざる者の差を生み出した。やがて、豊中市域においても多くの古墳が築造されるようになる。前期古墳は待兼山古墳、御神山古墳などの前方後円墳が千里丘陵の縁辺部を利用して築造され、前期末～中期には鐵製武器類を多量に保有する桜塚古墳群が豊中台地上に形成される。後期には太鼓塚古墳群、新免宮山古墳群などの古墳群が知られている。これらの古墳の築造に携わったと考えられる人



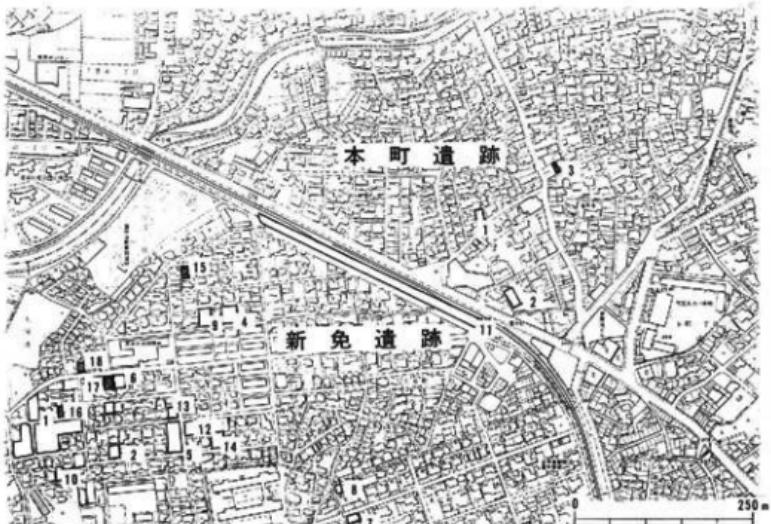
第1図 周辺の地形図

人の集落の状況も最近徐々にではあるが明らかになりつつあり、新免・本町遺跡の他に、柴原遺跡・内田遺跡・螢池西遺跡・山ノ上遺跡・利倉遺跡・利倉西遺跡・島田遺跡・庄内遺跡などがその例としてあげられよう。なお、5世紀後半頃から奈良時代にかけて、桜井谷の支谷を利用して須恵器の窯跡が築造され、本来は50基以上あったものと考えられている。柴原、本町遺跡では多くの不良品が出土し、両遺跡が須恵器の集積・選別および搬出の機能を持った集落であったことがうかがえる。

7世紀に入り、豪族達はそれまで古墳築造に費した力を寺院建立に向け始め、豊中市域においても飛鳥時代末の建立と考えられる金寺山庵寺が存在する。

奈良時代には豊中市域も摂津國豊島郡として律令制の末端に位置づけられるようになり、柴原遺跡・島田遺跡などが当時の集落遺跡と思われる。また、上津島南遺跡で検出した掘立柱建物群は港の機能を備えた政治的な施設であった可能性が強い。

平安時代の後半、12世紀になると、その上津島南遺跡の微高地上に、白磁を副葬する木棺墓を伴う掘立柱建物群が出現し、律令制の崩れる中で台頭してきた有力農民の屋敷地と見られている。同じ頃、山ノ上遺跡では文献には残らない寺院の存在したことが調査で確認され、室町時代頃まで存在したようである。中世の集落遺跡は、穂積遺跡・小曾根遺跡などが知られる。両遺跡は、当時の土地利用を記した『今西文書』とその調査成果を照合することが可能であり興味深い。



第2図 調査地点位置図



# 新免遺跡第15～18次調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、豊中市立井町2丁目14-20(第15次調査地点)、同町3丁目10-8(第16次調査地点)、同町3丁目3-24(第17次調査地点)、同町3丁目11-21(第18次調査地点)の四箇所で実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査期間及び調査面積は以下のとおりである。

○第15次調査地点	昭和61年5月28日～61年6月21日	63m <sup>2</sup>
○第16次調査地点	昭和61年7月18日～61年8月12日	75m <sup>2</sup>
○第17次調査地点	昭和61年9月1日～61年9月27日	93m <sup>2</sup>
○第18次調査地点	昭和61年12月10日～62年1月16日	205m <sup>2</sup>
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育課文化係が実施し、柳本照男(第15・18次)、服部聰志(第16・17次)が現地を担当した。
4. 本書の編集及び執筆は須藤 宏(第15次)、酒井泰子(第16次)、山元 建(第17・18次)が各調査地点について行い、全体の編集は山元が担当した。また、石器については松木武彦(大阪大学)が執筆した。
5. 土地所有者山本庸一氏、前田道子氏、山本直夫氏、長尾正晴氏には、調査の実施に際し、多大なる御理解をいただいた事を記し、深く感謝いたします。

## 目　　次

I. 第15次調査地点	3
1. 調査の概要	3
2. 出土遺物	4
II. 第16次調査地点	7
1. 調査の概要	7
2. 検出構築	7
3. 出土遺物	11
III. 第17次調査地点	17
1. 調査の概要	17
2. 出土遺物	20
IV. 第18次調査地点	22
1. 調査の概要	22
2. 出土遺物	28
V. まとめ	35

# I. 第15次調査地点

## 1. 調査の概要

調査地点は、豊中市玉井町2丁目14-20に所在する。調査は建築予定地内を対象とし、その面積は63m<sup>2</sup>であった。

基本層序は4層からなり、第1層は厚さ10~20cmの盛土、第2層は厚さ5~10cmの灰褐色粘土質砂層、第3層は厚さ10~20cmの暗褐色粘土である。弥生時代、古墳時代の遺構はともに3層上面から掘り込まれている。第4層は地山となり、遺構はこの面において検出した。

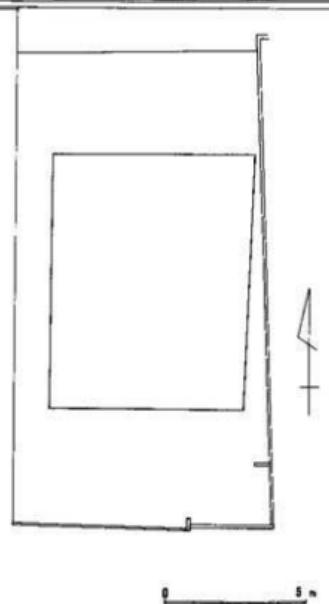
検出した遺構は、溝、掘立柱建物、ピット等で、その所属する時期は弥生時代中・後期、古墳時代後期である。以下、主な遺構について概述する。

**SD-1** 調査区の西部を南北にはしり、調査区北部に割り、東へ屈曲する弥生時代後期の溝である。検出した状態で幅30~40cm、深さ10~20cmを測るその断面形はU字形である。溝内の土層は基本的に2層であり、遺物のはほとんどはその上層部分から出土している。

**SD-2** 調査区の北西から南東へと弧をえがくようにのびる溝である。覆土中からの土器の出土は少なく、また小片のみであるが、その中に古墳時代のものと思われる須恵器片が含まれる。検出した状態で幅30cm、深さ4~10cmをはかる断面U字形の溝である。

**SD-5** (第3図) 調査区の南東にあり、南西から東へ弧状にのびる弥生時代後期の溝である。検出状態で幅50cm、深さ10cm未溝を測る。土器は溝底から5cm程浮いた状態で出土している。

**SB-1** 調査区の南東部にある3×3間以上の掘立柱建物であり、建物の主軸はN-18°Wである。方形の柱穴は検出状態で一辺40cm前後、深さ30~40cmを測る。柱痕が確認できたものがあり、その径は10cm程であった。柱穴の埋土中には主として古墳時代の須恵器片が少量含まれていた。



第1図 調査範囲図

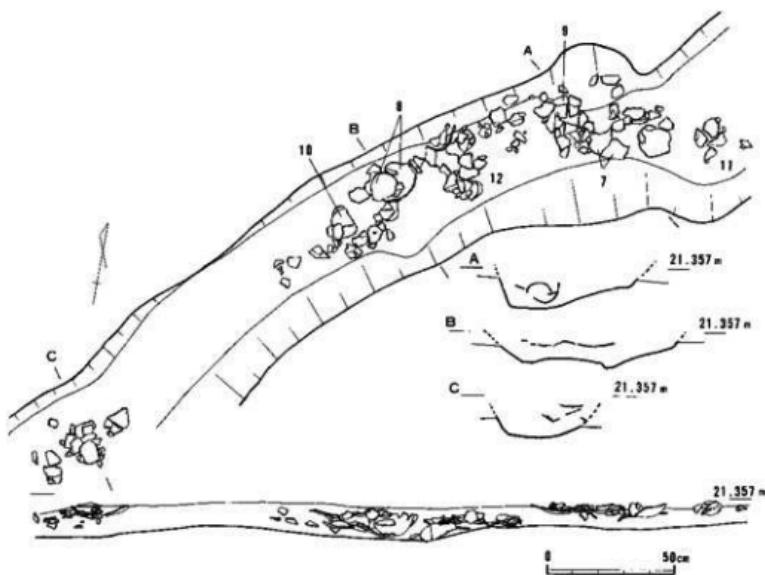
## 2. 出土遺物（第4図）

### SD-1出土土器（1～6）

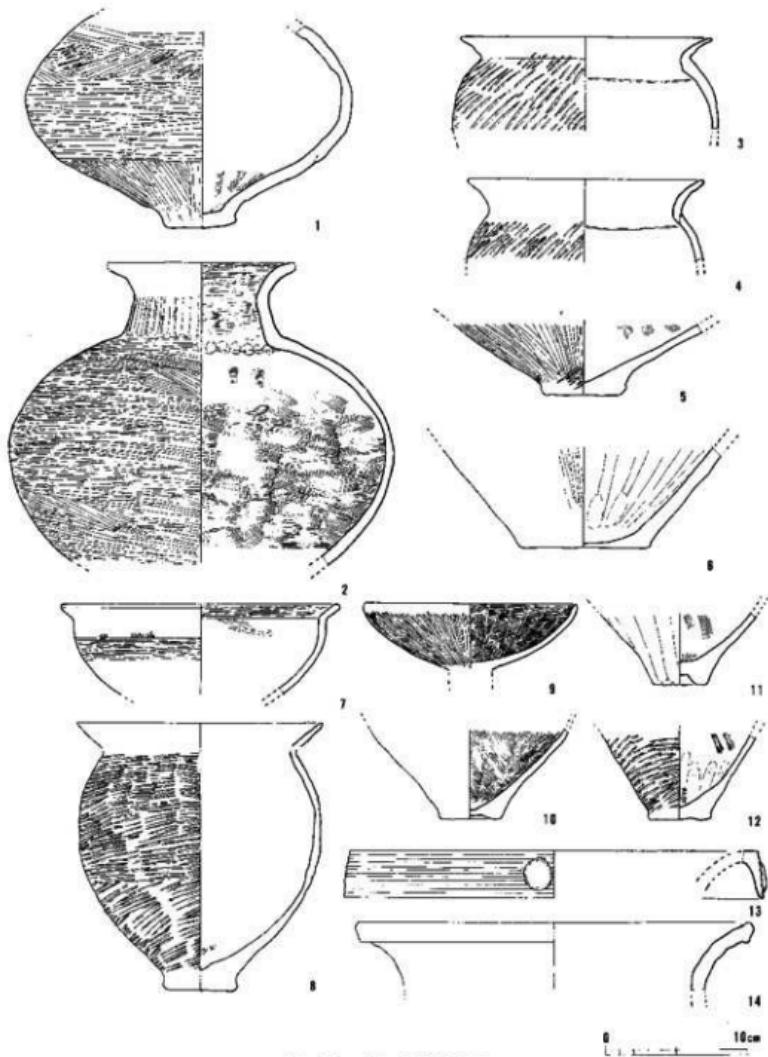
弥生時代中期・後期の土器が出土した。1は口頭部を欠く壺で、体部は球形を呈し、最大径23cmを測る。内面には刷毛目が認められ、外面浅黄橙色、内面は黒色だが、外面には黒斑が認められる。内面には2条の接合痕も残る。2は、球形の体部から直線的に内傾した後、短かく外反する口頭部の続く壺で、外面は全面にヘラミガキを施し、内面は刷毛目で、口頭部にはヘラミガキも認められる。体部と頸部の接合部分には指オサエの跡が明瞭に残る。口縁端部と底部を



第2図 遺構全体図



第3図 SD-5 遺物出土状態



第4図 出土土器実測図

欠くものの、口径16cm、高さ26cm程であったと推定され、体部最大径は27cmを測る。1・2はSD-1の南部より直立した状態で並んで出土したものである。3は底で、復元すると口径17cmになると考えられる。外面橙色、内面淡橙色を呈し、体部外面にはクタキが施される。4

も甕の口頭部で内外面とも灰白色を呈し、摩滅が激しいが外面にタタキが認められる。5は甕の底部で、外面はタタキの後ヘラミガキ、内面は板ナデ状の刷毛で各々調整する。内外面とも橙色を呈し、外面には黒斑が広く認められる。6は甕の底部で、灰白色を呈し、内部は指ナデ痕が残り、外面はわずかにヘラミガキが認められる。

**S D - 5 出土土器 (7~12)** 7は鉢で、にぶい褐色を呈し、半球状の体部から短く外傾する口縁部が続き、端部は面をなして終わる。体部外面刷毛調整の後、体部外面から口縁部内外面にかけてヘラミガキを施す。また体部内面には板ナデ状の調整が認められ、口径は復元すると19cm程になると思われる。8は甕で口径16.8cm、高さ18.8cmを測る。内外面とも浅黄橙色を呈し、剥離が激しいが、外面にタタキが施されている。9は楕状の杯部を有する高杯で、口径14.8cmを測る。内外面とも橙色を呈し、外面はヘラミガキ、内面は刷毛調整の後、暗文状のヘラミガキを放射状に施す。10は甕の底部で、にぶい橙色を呈し、内面には黒斑も認められる。外面には指ナデが認められ、内面には刷毛が施される。底部は一度くぼんだ後に中央部で再び突出する。11も甕の底部で淡橙色を呈し外面には黒斑が認められる。外面は指ナデ、内面には刷毛が施され、底部は中央がくぼむ。12は甕の底部で淡橙色を呈し、底面を中心に黒斑が認められる。外面はタタキ、内面には指ナデ、刷毛が施される。これらの土器は、9の高杯が中期的な様相を呈する以外は弥生時代後期のものと考えられる。

**包含層出土の遺物 (13・14)** 13は弥生時代中期後半の甕の口縁端部で、灰白色を呈し、外面には黒斑が認められる。端面には6条の凹線文が施された後、円形浮文が認められる。また、口縁部内面にヘラで刻み目を施す。14は須恵器甕の口頭部で、復元口径28cmを測り、端部はやや肥厚させ面をなして終わる。

## II. 第16次調査地点

### 1. 調査の概要

調査地点は豊中市玉井町3丁目10-8に所在する。調査は個人住宅の建て替えに伴って行い、対象面積は約75m<sup>2</sup>である。

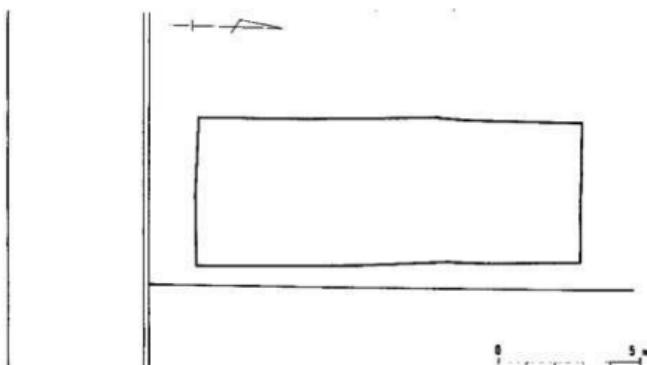
基本層序は大略3層に分かれる。Iは耕作土、IIは床土、IIIは遺物包含層である。調査区南半部では弥生時代のプライマリな包含層が比較的良好に遺存するが、北半部はSK-5の掘削等により古墳時代後期の段階に相当搅乱を受けている。

今回の調査では、弥生時代中～後期の堅穴式住居址2、古墳時代の溝1、弥生～古墳時代の土塁及びピットを検出した。以下主な遺構・遺物について概述する。

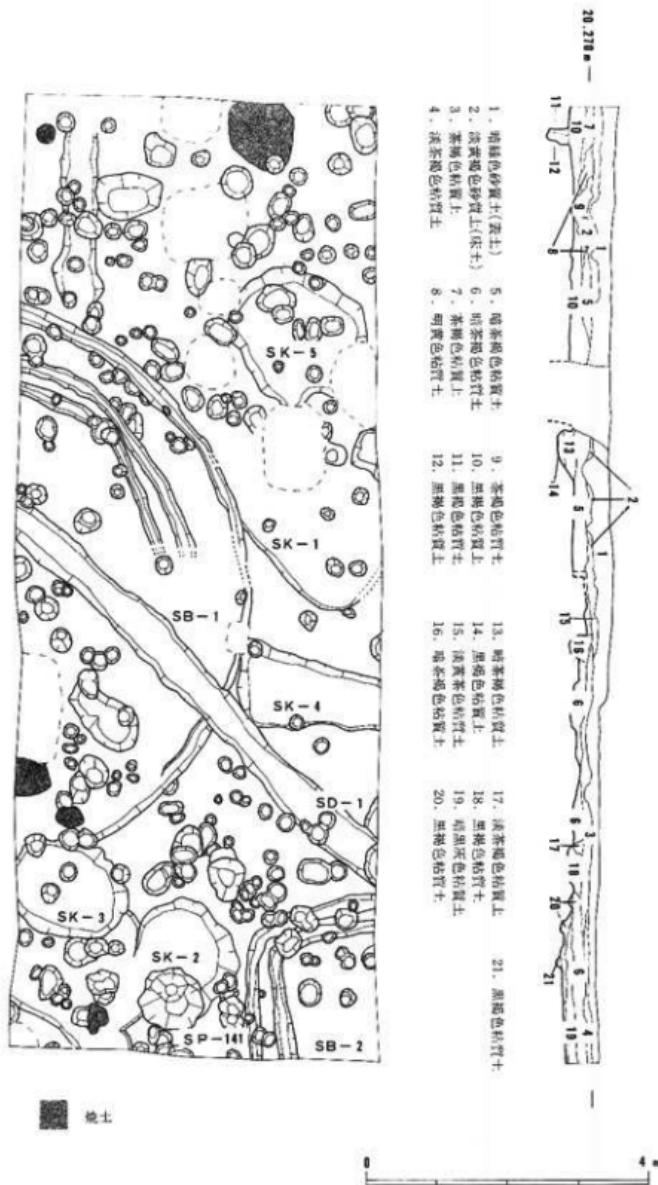
### 2. 検出遺構

**SB-1** (第7図、図版4-2) 調査区の西側中央で検出したもので、西半分は調査区外にあり、今回調査できなかった。円形プランを呈し、直径約8mを測る。古墳時代の溝や土塁が埋土上から掘り込まれるなど、遺存状況は良好とは言えないが、周溝及び柱穴を検出できた。周溝は計3条で、幅20～30cm、床面とのレベル差は2～3cmである。また、周溝1・2の南側部分は、堅穴掘削時に掘りすぎ、一部貼り床にして修築した上から掘り込んでいる。2回建替を行ったと考えられるが、その前後関係については不明な点が多い。住居に伴う柱穴についても他の時期のものと混在しており、詳らかでない。出土遺物から見て弥生時代中期と思われる。

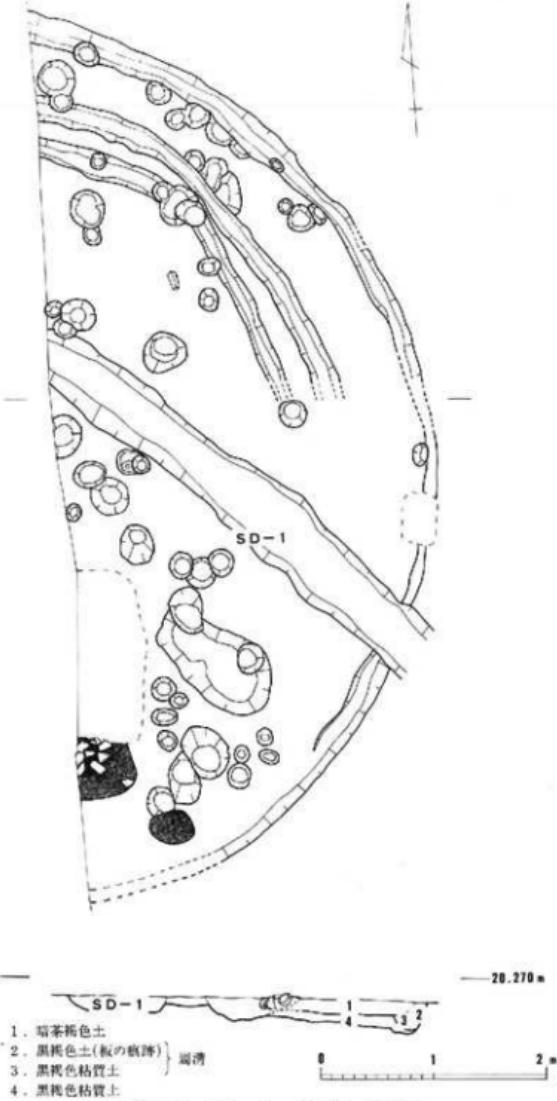
**SB-2** (第8図、図版5-1) 調査区東南端で検出したもので、西北コーナー部分の周溝と柱穴を検出できた。平面プランは方形と思われるが、規模は不明である。周溝は2条認められ、増改築の可能性があるが、その前後関係及び住居に伴う柱穴については明らかにし難



第5図 調査範囲図



第6図 検出構全体図



第7図 SB-1 平面図・断面図

い。時期については、出土遺物より、弥生時代中～後期と考えられる。

SP-141 (第9図、図版5-2)  
調査区南端中央で検出したもので、不整形な隅丸方形プランを呈する。規模は一辺約75～85cm、深さは約40～60cmである。ピット内には灰層が厚く堆積しており、灰穴炉であろうと考えられる。周囲に柱穴と考えられるピット、周溝等を検出してないので屋外炉の可能性が高い。

埋土中より甕、二次焼成を受けた高杯が出土している。これより時期は弥生時代中期と推定される。

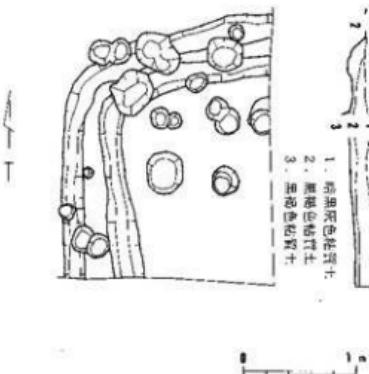
**土塙** 本調査地点では計5基の土塙が検出された。形状と規模であるが、SK-2・3・5は円形状の不定形なもので、規模は長軸1.6～2.0m、短軸1.4～2.0mを測る。深さは約6

~15cmとごく浅いものである。SK-4(図版6-1)は東側部分が調査区外にのびるため、正確な形状・規模は不明であるが、不定形な長方形ないし船形状を呈すると思われる。SK-1であるが、南側の肩の一部を検出したのみで形状・規模とともに不明である。

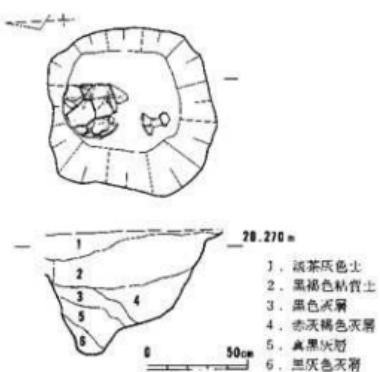
時期については出土遺物より、SK-4が弥生時代中期、SK-1が同じく後期、SK-2・3・5が古墳時代後期であろう。また、古墳時代の上塙3基からは土製丸瓦、滑石製勾玉、白玉が出上している。これらの上塙の附近にはそれぞれ焼土が認められ、何らかの関連をもつていることも考えられる。

#### SD-1 (第10図、図版6-2)

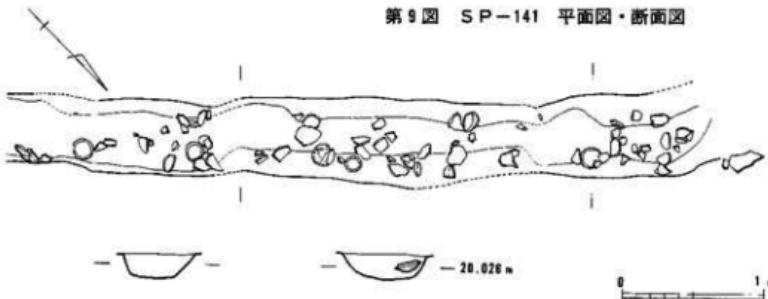
SB-1を切って西北-東南方向にはしるもので、両端はさらに調査区外にのびると推測される。現状で長さ約7.2m、幅約0.4~0.6m、深さ約8~15cmを測る。この溝から須恵器を主体とする上器群が、弥



第8図 SB-2 平面図・断面図



第9図 SP-141 平面図・断面図



第10図 SD-1 平面図・断面図

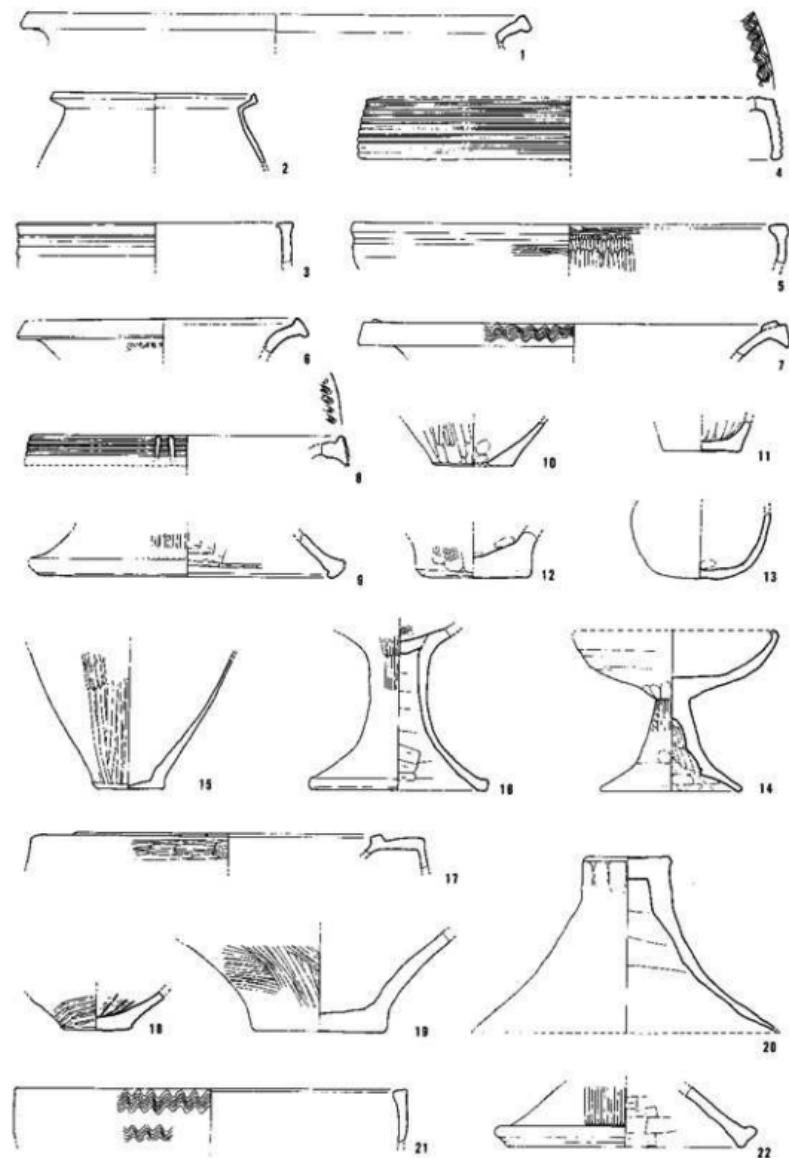
生土器が1点混入していたのを除けば、一括して出土した。また、埋土中より土製管玉1・丸玉2、ガラス小玉1、流紋岩製管玉1、滑石製勾玉1・白玉多数が出土している。これらの出土遺物からみて、時期は古墳時代後期と推定される。

### 3. 出土遺物

今回の調査では弥生土器、土師器、須恵器、石器及び下類等が出土したが、ここでは遺構内出土遺物について主要なものの記述する。また石器及び下類についてはそれぞれまとめて扱うこととする。

**S B - 1 出土遺物** (第11図1~14) 1・2・9・13は住居内埋土下層より、3はS P-1内より出土し、その他は埋土上層出土である。1・2は短く屈曲する口縁部をもつ甕である。1は端部を肥厚させ、上・下に拡張している。2は端部を上方に曲げており、口縁部～体部上端外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整と思われる。3は高杯もしくは鉢の口縁部である。端部は面をなし、内方に肥厚する。外面には凹線を施し、口縁部及び内面はヨコナデである。5は鉢で、内窯しながら立ち上がり、端部を内方に肥厚させる口縁部をもつ。体部外面及び内面上端部までヘラミガキ、口縁部外面ヨコナデ調整である。4・6~8は甕である。4は口縁垂下部で、外面には凹線を、上端面には波状文を施す。6は外反して大きくひらく口縁部である。端部は上・下に拡張し、内面～口縁部はヨコナデ、頸部はハケ調整を行う。7も大きく外反してひろがる口縁部で、端部は下方に拡張する。端面には波状文を施し、内面には円形浮文がみられる。ヨコナデ調整による。8は上・下に拡張する端部をもつ口縁部である。端面には凹線を施した上に棒状浮文を貼り付けている。端面上面にも扇形文がみられる。外面は暗赤灰色を呈し、顔料あるいは赤土を塗った可能性もある。9は脚部である。外面はヘラミガキを施し、脚部には櫛描きの文様常の痕跡がみられる。櫛端面はナデ、内面はヘラケズリであるが、端部を削り残すため鋭い段状をなす。10~12は底部である。10は甕で外面はヘラ状工具で縱方向になでており、内面は指ナデである。11も甕で、底部はナデ、内面は強いナデ調整を行う。12は甕である。底面及び内面はナデ、外面は粗いハケ調整を行う。13・14は住居址の上面から掘りこまれた遺構に伴うと考えられる土器群のものである。13は小型の鉢である。平底を呈し、内・外面ともナデ調整である。14は浅い楕形の杯部をもつ高杯である。口縁部は内方におりまげ、丸くおさめる。柱状部からなめらかにひらく脚部をもつ。杯部はヨコナデで、外面下半は指ナデも認められる。脚柱部外面はヘラ状の工具で縱方向になでている。内面は絞り痕を有す。裾部内面はナデ調整である。口径14.6cm、裾部径9.9cm、器高11.3cmを測る。

**S P - 141 出土遺物** (第11図15・16) 15は平底を有する甕である。底部はナデ、体部外面は縱方向のヘラケズリ、下半はヘラミガキで底近くにはハケも認められる。内面は調整不明。16は高杯の脚部である。細長い柱状部からなめらかにひらく、端面をつくり、上方に肥厚する。円板充填法による。脚柱部外面上半は縱方向ヘラミガキ、下半～脚部は剥離のため調整不明。内面はヘラケズリを施し、杯部底はナデである。二次焼成を受けている。

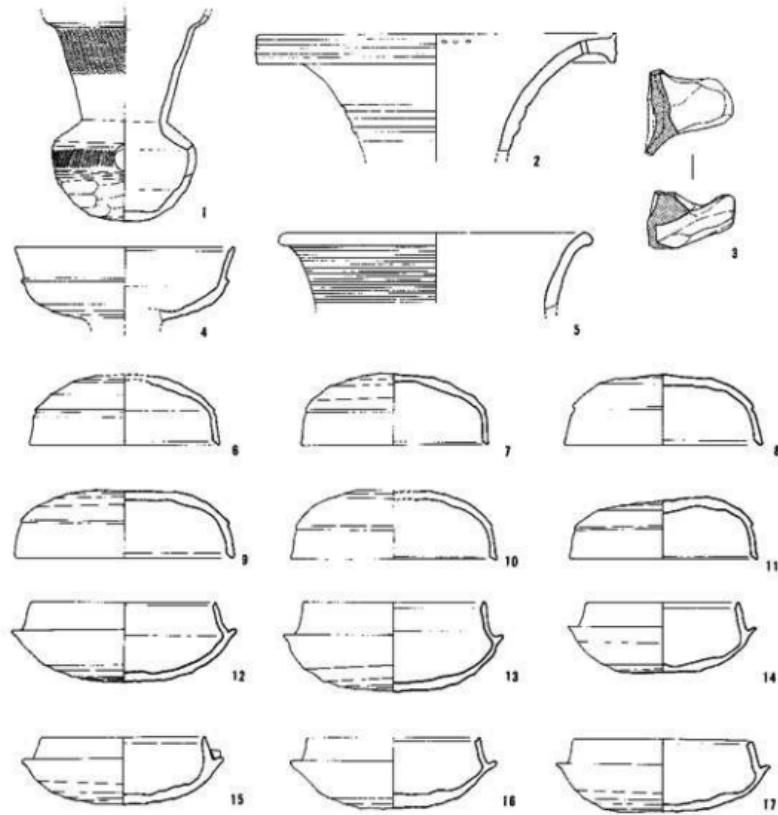


第11図 出土遺物実測図

0 10cm

**SK-1 出土遺物** (第11図17・18) 17は上層出土の高杯Bである。ほぼ水平に張り出す口縁部に巾広く垂下する端面をもつ。内面に巡る方形の突部は口縁上端より突出し、上端面は内傾する。口縁部上面及び端外面は横方向のヘラミガキ、内面はヨコナデ。18は最下層山上の甕底部である。底はナデ、外側は平行タタキ、内面はくもの巣状にハケ調整を施す。内面底にこげついたようなものが付着している。

**SK-3 出土遺物** (第12図1) 図化し得たのはほぼ完形の須恵器の器1点のみである。肩の張った体部で、下半は手持ちヘラケズリを施す。肩部に沈線、体部中央に弱い凹線2条が巡り、この間を櫛掃列点文で埋めた後、一孔を穿つ。頸基部は太く、頸部は直接的にひらき、外方に張り出して屈曲し、口縁部をつくる。頸部上半には細かい波状文が施される。口縁部は



第12図 出土遺物実測図



欠損する。

**S K - 4 出土遺物** (第11図19・20) 19は蓋の底部である。底面及び内面はナデ、体部外側はヘラミガキを施す。20は使用の蓋で、円錐台状の上部から大きく笠形にひらく。外面及び天井部はナデ、内面は板ナデである。

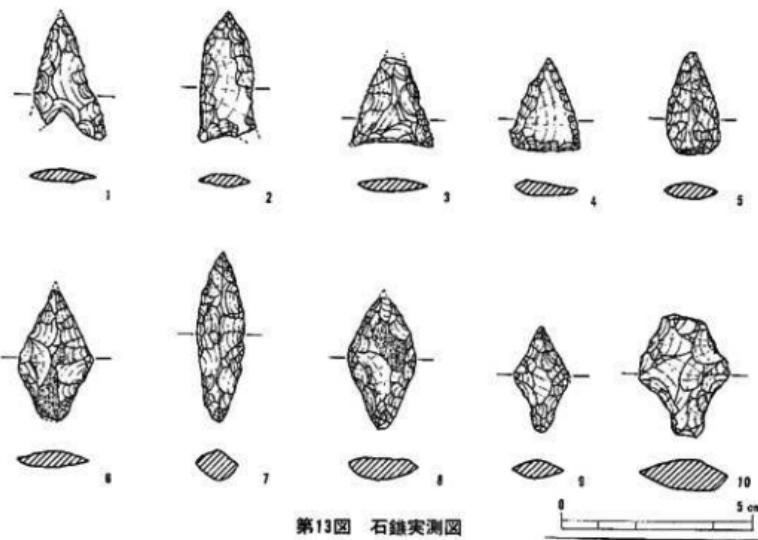
**S K - 5 及び包含層出土遺物** (第11図21・22) 21は包含層出土であるが、S K - 5 の上面の可能性もある。鉢の口縁部で、内窓気味に立ち上がり、端部は面をなして内方にやや肥厚する。上端面には強いヨコナデのため四線状のものがはしる。外面には波状文が2帯施される。内面は調整不明。22はS K - 5 内出土の脚部である。斜めに大きくひらく裾部から端部は上方に拡張し、下方にやや肥厚する。端部上面と端面は強いヨコナデにより四線状を呈す。外面は縦方向ヘラミガキ、内面はヘラケズリ、また裾端部上面には刺突文を3個一単位で施す。端部外面に黒斑が認められる。

**S D - 1 出土遺物** (第12図2~17) ここに図示したものはすべて一括して出土しており、須恵器が主体をなしている。器種的には杯類が圧倒的である。2の弥生土器の蓋口縁は混入したものである。大きく外反してひらく口縁で、端部は上・下に拡張し、面をなす。端部と頸部に凹線を巡らす。頸部内面にもナデにより四線状のものがはしる。口縁端部付近に3個一単位の小孔を穿っている。内・外面ともナデ調整。3は土師質の瓶の把手である。ナデ調整による。4以下は須恵器である。4は無蓋高杯の杯部である。口縁部は上外方に比較的長くのびる。端部と段にはシャープさを残している。5は甕口縁である。やや外反してひろがる頸部にはカキメ調整を施し、端部は丸く外側にやや肥厚させる。焼成は不良である。6~11は杯蓋、12~17は杯身である。杯蓋は口径が15cmをこえるものもあるが、概ね13~14cmを示し、器高は5cm前後である。口縁部はほぼ垂直ないしはやや外方にのび、端部内面には内傾する段を有する。天井部との境の稜線は、鋭いものとやや突出するが鈍いものの二者がある。また、10は天井部内面にスタンプ痕が認められる。杯身は口径12~13cm、受部径14~15cmのものが多い。立ち上がりは長く、内傾しながら上方にのび、端部に段を有する。受部は上外方につまみ出される。

これらの須恵器は器形が大型化する直前と考えられ、概ね桜井谷編年のI型式3段階墳に位置づけられよう。しかし、杯蓋の稜や杯身の受部はシャープさを欠くものがあるなどやや後出の要素も認められる。

#### 石器

(1) 打製石器 (第13図) 包含層、溝、ピットなどから約10点が出土したが、その形態は多様である。1は深い抉りを持つ凹基式で重量は1.4gである。2は両側縁がゆるやかなS字状を呈する細長い凹基式で重量1.8gを量る。同様の形態のものが勝部、田能などにも見られる。3は両側縁に細かい鋸歯状剥離を施しており、重量1.7gを量る。平基式の4は重量1.5g、円基式の5は重量1.6gを量る。6は片面に原面を残す尖基式で、重量は2.6gである。7は両面に明瞭な稜を有する厚手の尖基式で重量は3.6gに達する。8は片面に原面を残す尖



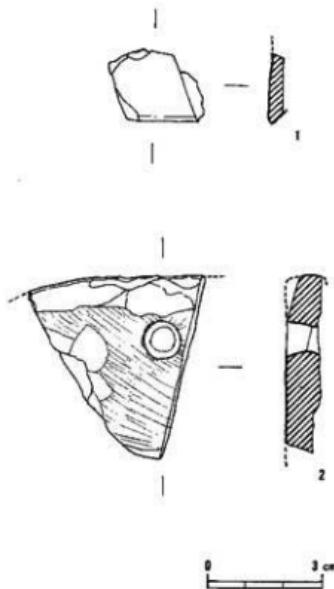
第13図 石鎌実測図

基式で重量3.5 gを量る。9は小型の有茎式で  
重量は1.55 gを量る。10は剥離が粗く、先端部  
付近は細部調整によるエッジが作られていない  
ところから、有茎式石鎌の未成品と考えた。重  
量は4.5 gである。

3、7、10以外は片面または両面に大剥離面  
や原面を残している。石材は、肉眼観察によ  
り、すべてサヌカイトを使用しているが、香川  
県産を代表とする非二上山系サヌカイトのよう  
な岩質のものも少數ある。  
(松木)

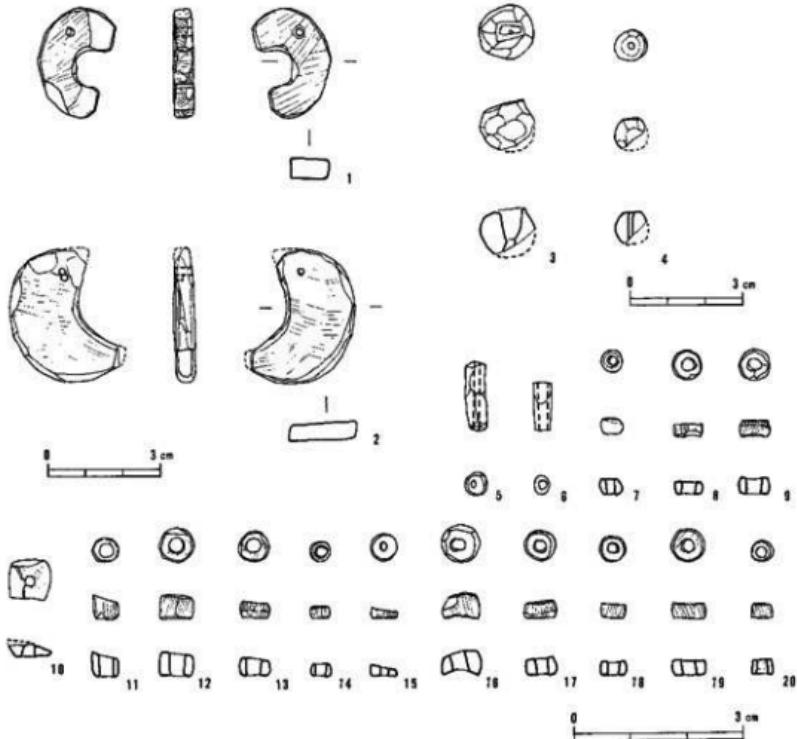
(2) 石庖丁 (第14図) 住居址から計2点  
出土した。1はSB-1出土の刃部破片である。  
2はSB-2下層出土の破片である。下面是剥  
離しているが、上面には削痕がみられる。いづ  
れも黒灰色を呈し、粘板岩製である。

玉類 (第15図) 古墳時代後期と考えられ  
る溝及び土塁より土製丸玉3・管玉1、ガラス  
小玉1、流紋岩製管玉1、滑石製勾玉2・白玉  
150個以上が出土した。3・4は土製丸玉、5



第14図 石庖丁実測図

は管玉である。これらは淡茶褐色～茶褐色を呈し、胎土は精良である。7はガラス小玉である。両端に面をもつ。淡青色を呈し、透明度は高い。6は細形の管玉である。穿孔は片側から行っている。暗緑灰色を呈し、流紋岩製と思われる。1・2は暗青灰色を呈する滑石製の勾玉である。1は全面に研磨痕が認められる。「C」字状であるが、背面には稜を残し、全体に輪なつくりである。2は両端部を欠損するが、三日月形を呈するものである。全体に巾広いもので、1とは形状を異にする。両面に粗い研磨痕がみられる。また片面には穿孔時に失敗した痕が認められる。白玉については出土数が多いため、その概略についてのみ記すこととする。径は5mm前後のものが多く、形状的には偏平なもののが多数である。側面に稜線をもたず全体にゆるやかに膨らむものがほとんどだが、棱線をもつものも存在する。つくりは全体に輪なつくりが多く、中には未成品(10)も1点まじっている。石材的には青灰色の所謂「滑石」のものから、灰白色を呈しやや透明感のあるものまで、2～3種に分類できる可能性がある。また形状的にも数種に分けられるが、これらについては後の機会に譲ることとする。



第15図 玉類実測図

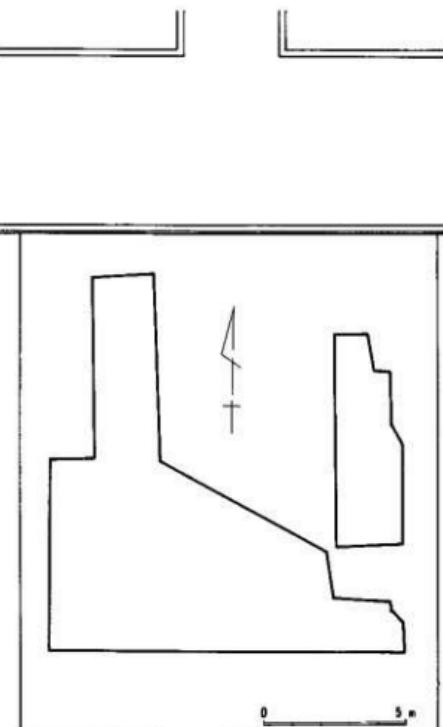
### III. 17次調査地点

#### 1. 調査の概要

調査地点は豊中市玉井町3丁目3-24に所在する。調査は建築予定地内を対象とし、南北に2本のトレーンチを設けた後に住居址を検出した南部を拡張した。層位は現代の盛土、淡黄灰色砂層、包含層、(暗茶褐色粘質土)、地山と大別されるが、包含層は一部を除いて後世の削平をうけ認められなかった。なお、地表から遺構面(地山面)までは、ほぼ30~40cmである。

調査区全体から堅穴式住居址、溝などの他に大小のビットを検出した。それらの時期については明確にし得ないものが多いが、後述するように堅穴式住居址は古墳時代のものであり、石庖丁などが出上したビット等から考えて、弥生時代中期に遡る遺構もあるようである。以下2基の堅穴式住居址を中心に調査の概略を報告する。

S B-1 (第19図) 調査区の南端、S B-2 の西側で検出した古墳時代の堅穴式住居址で、南端部が調査区外にのびるため南北長は明らかにし得なかつたが、ほぼ一辺6.5mの正方形を呈すると思われ、四周に幅12~34cmの周溝が巡る。遺構検出面から床面まで深さ8~20cmを測り、周溝底面までは15~25cmである。この住居址で注目されるのは、東西壁に付属する形で、間仕切の壁を設けたとみられる深さ数cmの小溝がコの字形に巡り、入口を中心にもける南北2.6m×東西1.8mの二つの小室が想定されることである。各々の壁のコーナー部分に直径30~35cm、深さ25cmのビットが認められ、主柱穴であろうと思われる。また、東側の小室の南北の小溝は2条走る部分があり、建替えもしくは小室を設ける際に途中で壁の位置をずらした可能性がある。なお、住居址床面中央に直径50cm程の焼土が認められる。



第18図 調査範囲図



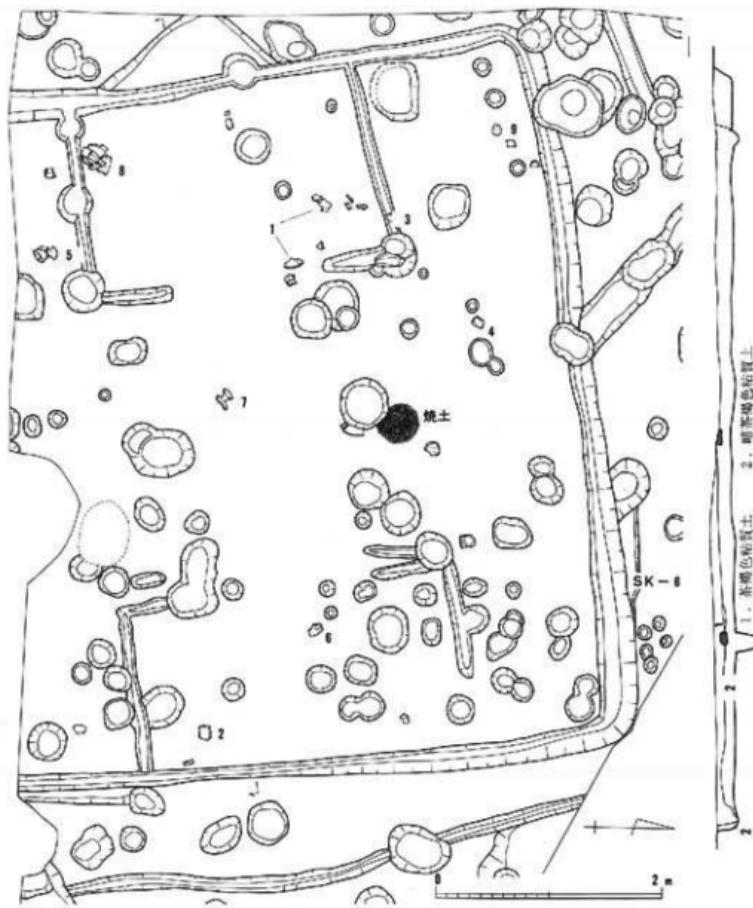
第17図 造構全体図

床面直上もしくは若干浮いた状態で第21図に示す土器が出土している。その殆どは大小二形式の高杯で、特に大形の杯部に縫を持つ高杯（1、2）が各小室部から一点ずつ出土していることは興味深い。また、住居址の南西部で玉類（第22図1～7）が出土し、西側小室部に伴うものと考えられる。

SB-2（第20図） 調査区の



第18図 石磨丁出土状態



第19図 S B-1 平面図・断面図

東南端で検出した古墳時代の方形の堅穴式住居址で主軸は磁北よりほぼ西に45度ふり、北東辺に一回の拡張が認められ、周囲には側溝が巡る。住居址の北端部を検出したのみであるため規模を明示できないが、拡張後では北西辺2.8m以上、北東辺で2.4m以上を測る。地表面から床面まで5~8cmを測り、周溝底面までは7~15cmである。柱穴は確認できなかった。なお、北東辺付近包含層から滑石製白玉（第22図9・10）が出土している。

S K-6 S B-1 の北辺を切って掘られた土塙で、平面で確認し得なかつたため規模等は不明であるが長さ80cm、深さ10cm程の東西に長い土塙のようである。中から須恵器（第21図11・12）がまとまって出土した。

## 2. 出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器及び石庖丁、石鐵各1点、玉類10点が出土した。以下ではSB-1出土の土師器を中心概略を報告する。

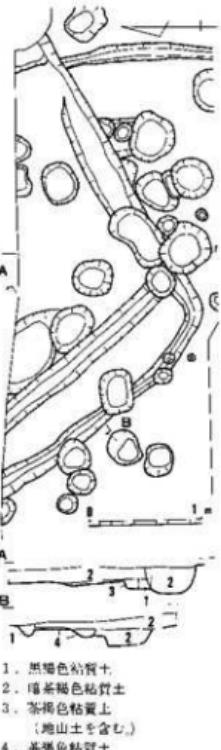
**SB-1出土土器** (第21図1~9) 1・2は大形の高杯の杯部である。1は復元口径22cmを測る高杯々部で、黄橙色を呈し、体部下半で鈍い稜を形成した後、やや内湾して、外傾し、端部はやや立ち上がり気味に肥厚して終わる。杯部上半はヨコナデで成形し、内面底部は不定方向のヘラミガキがみられる。2は口縁部を欠くが口径22cm程度になると考えられる。1に比べ薄手で、黄褐色を呈し、内外面とも摩滅が激しく調整は不明である。3~7は椀状の杯部を有する小形の高杯で、3・5・7は黄橙色、4・6は赤色を呈する。6・7の脚部は一度屈曲して広がる形態を有し、脚部内面に布目疤痕が残る。外面は、6ではヘラミガキ、7では面取り状のナデが認められている。3・7の口縁端部はやや内面に丸めるように肥厚させて終わる。7は口径13.2cm、脚部径9.8cm、高さ11.7cmを測り、3~6もほぼ同寸と考えられる。

8は口径23.6cm、体部最大径24.4cm、高さ17.6cmを測る黄褐色を呈する平底の鉢である。剥離が激しく、調整等はよくわからないが、内外面とも指ナデ調整痕が強く残り、全体に粗いつくりである。口径は短く外傾し、片口部が設けられている。体部内外面に接合痕が明瞭に残る。これらの土器は、須恵器出現前後の土師器の特徴を示している。

**SK-6出土土器** (同11・12) 11は直徑11.8cm、高さ4.9cmを測る須恵器杯身である。立ち上がりはやや外反気味に内傾し、端部はまだ若干シャープさを残す。12は復元口径42.5cmを測る大形の須恵器の裏の口縁部で、外反気味に広がり、外面に2条の低い突帯が認められ、横描波状文が施される。端部は面をなして終わり、外面には自然釉が付着する。SK-6の須恵器は桜井谷編年でII型式1段階のものと考えられる。<sup>3)</sup>

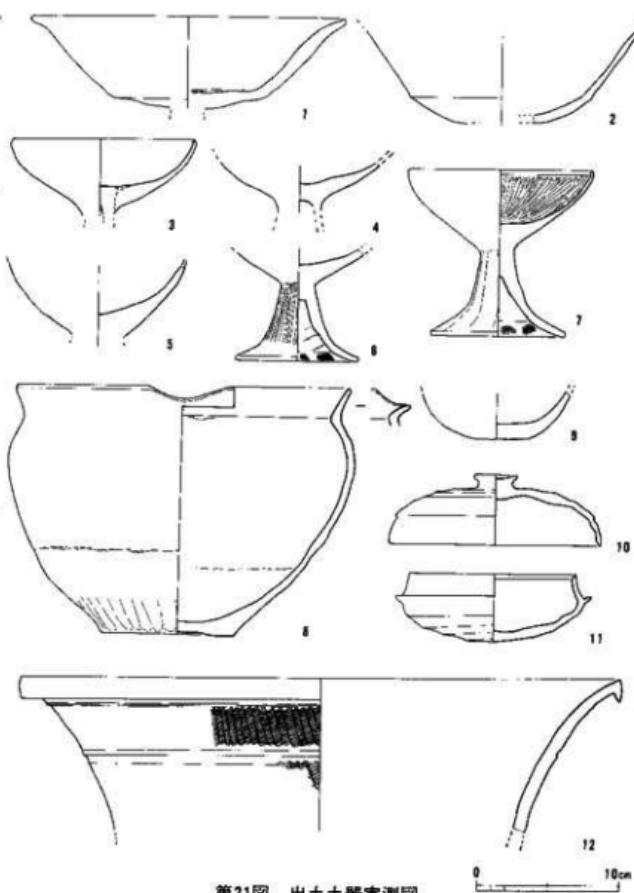
**包含層上面出土遺物** (同10) 10は第1トレンチから出土したつまみを有する杯蓋で、直徑15cm、高さ5cmを測り、体部に鈍い稜を有し、端部は段を有するが、シャープさを欠く。SK-6出土遺物同様、桜井谷編年でII型式1段階のものと考えられる。

**玉類** (第22図) 10点 (管玉1点、白玉9点) 出土し、材質は全ていわゆる滑石製である。1~7はSB-1南西部の埋土下層、8および9・10は各々SP-58、SB-2東側の包含層

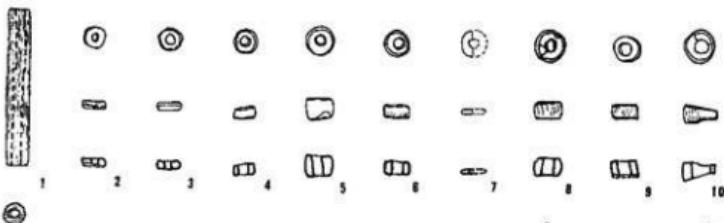


第20図 SB-2、平面図・断面図

より出土した。  
1は長さ2.8  
cm、幅4mmの  
淡緑色を呈す  
る管玉で、両  
面より穿孔し、  
端面に研磨痕  
が残る。2～  
10は、白玉で、  
直径3.8～5.  
8mm、厚さ0.  
7～3.7mmを  
調り、側面、  
端面とも磨い  
たものが多い。



第21図 出土土器実測図



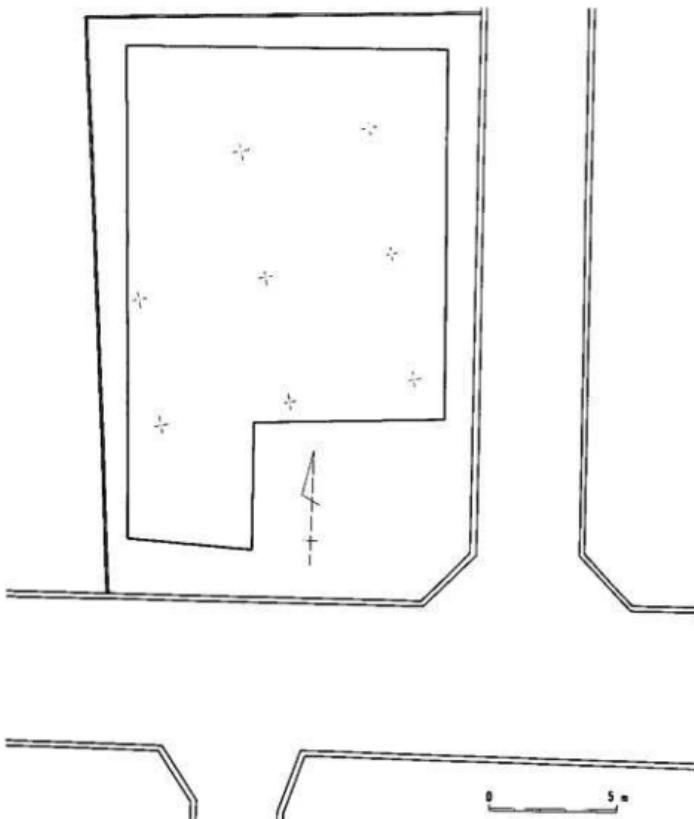
第22図 五類実測図

## IV. 第18次調査地点

### 1. 調査の概要

調査地点は豊中市玉井町3丁目11-21に所在し、調査は建築予定地のみを対象に行なった。調査地の層序は上方より現代の盛土、淡灰茶色砂質土（耕作土）、茶褐色粘質土（遺物包含層）、地山と続くが、耕作土と遺物包含層が残るのは調査地の南部のみで、大半の部分では、盛土の直下で地山を検出した。地表から遺構検出面（地山面）までは約70cmである。調査区の全域から竪穴式住居址、土塁、方形周溝墓および多量のピットを検出した。

方形周溝墓（第26図） 調査区のほぼ中央で検出した平面長方形を呈する方形周溝墓で周溝



第23図 調査範囲図

を含めた規模は南北で9mを測り、東西長は13m程になると思われる。周溝は北西コーナーと南西コーナー部分でとぎれて陸橋状を呈し、他のコーナー部分も浅くなる傾向がある。周溝は幅約1m、深さ20~40cmを測り、周溝内より多量の土器が出土した。盛土は既に削平されていたが、幸いにも6基の主体部を確認した。

1号主体部は、周溝裏のはば中央で検出した南北に主軸をとる木棺墓で、長さ2.9m、幅1.5mを測り、木棺は既に消滅していたが、その痕跡を認めることができた。その規模は、長さ2.1m、幅0.65m、高さ0.25m以上で、棺材の厚さは20cm程と推定される。木口板が側板の内側にくる形式である。ただ、底板は確認し得なかった。

2号主体部は、1号主体部北側に位置し、東西に主軸をとる木棺墓で、長さ2.1m、幅1.1m、深さ20cmを測り、南東端部は3号主体部に切られている。木棺は既に消滅していたが、断面でかろうじて確認した痕跡から長さ1.73m、幅0.6m、厚さ10cmの法量が推定できる。

3号主体部は、1・2号主体部の東側に位置し、主軸を南北にとる土塙墓で、長さ1.7m、幅0.8m、深さ20cmを測る。4号主体部はその南東に平行して存在する土塙墓で、長さ1.8m、幅0.9m、深さ9cmを測る。両者とも木棺墓であった可能性が高い。

5号主体部は1号主体部の西側に位置するややいびつな長方形を呈する土塙墓である。東端部は攪乱で欠くが、東西に主軸をとり、長さ0.95m、幅0.55m、深さ0.33m以上を測る。6号主体部はその西側に位置し、長さ1.35m、幅0.7m、深さ8cmを測る丸みを帯びた長方形を呈する土塙墓である。なお、周溝北辺より出土した甕（第32図23）は調査時に周溝埋土に掘り方を確認したため、周溝が埋まる過程でえられた甕棺墓であると考えられる。

**S B - 1**（第28図） 調査区の南西隅で検出した円形の竪穴式住居址で、北東の一部のみを検出した。周囲には幅20cmの周溝が巡り、地表面から床面および周溝底部までは各々12~16cm、10~15cm程を測る。内部に2ヶ所のピットを検出した。

**S B - 2**（第30図） 調査区南部で検出した一辺3.9mの方形の竪穴式住居址で、主軸は磁北よりやや西に振り、北西部と北東部のみを検出した。周囲には幅15~18cmの周溝が巡り、地表面から床面および周溝底部までは、各々1~5cm、5~16cmを測る。なお、北東部で弥生土器を含む疊混じり土のつまた上塙を検出し、住居址築造時にそれ以前の遺構を埋めたものと考えられる。

**S B - 3**（第30図） S B - 5の東部で北東部のごく一部を検出した円形の竪穴式住居址で深さ10cmを測り周溝等は認められない。S B - 5との前後関係は確認できなかった。

**S B - 4**（第30図） S B - 3のすぐ北方に長さ5mにわたって多角形状に走る幅16~20cm、深さ3~8cmの小溝を確認し、その南端はS B - 5によって切られている。おそらく平面多角形の竪穴式住居址であろう。



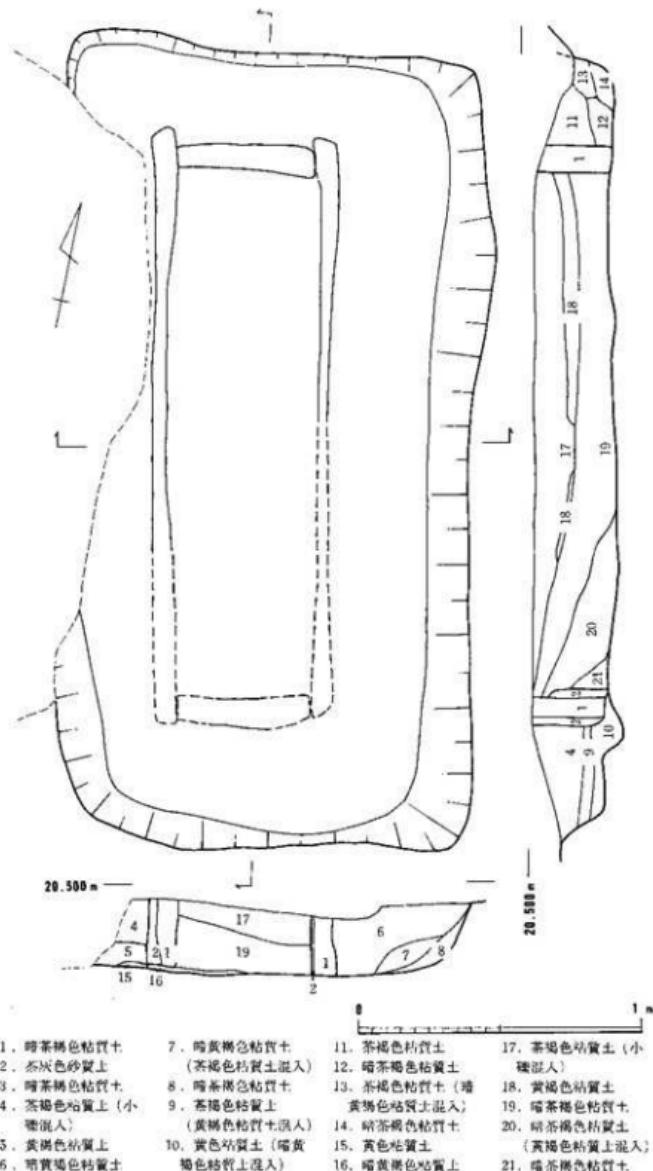
第24図 方形周溝墓東辺  
断面図



第25図 遺構全体図



第26图 方形周溝带平面图



第27圖 1號主体部平面圖・斷面圖

**SB-5** (第30図) 調査区南端でSB-2を切って検出した一辺2.8mの方形の竪穴式住居址でSB-2とはほぼ主軸がある。地表面から床面および北東部にのみ確認した周溝底部まで各々9cm、13~15cmを測る。柱穴は明確にし得なかった。なお、SB-2同様、弥生土器を含む疊混じり土のつまた土塙を検出した。

**SB-6** (第25図) 方形周溝墓の北辺に切られる形で幅15~25cm、深さ7~15cm程の小溝が断続的に弧状に巡り、直径5.5m程の竪穴式住居址が想定される。ただし、小溝が2条平行して走る部分もあり、建替えもしくは拡張がなされた可能性がある。

方形周溝墓と各住居址の前後関係は、切合い、あるいはその平面形から以下のような順序が考えられる。

SB-1・6 → 方形周溝墓 → SB-4 → 2 → 5

各々の住居址の時期は、SB-1・6が弥生時代中期と考えられる以外は、決め手に欠くが、SB-4に関する限り、平面多角形の竪穴式住居は、弥生後期、それも後半に散見されるためその頃の住居の可能性が高い。

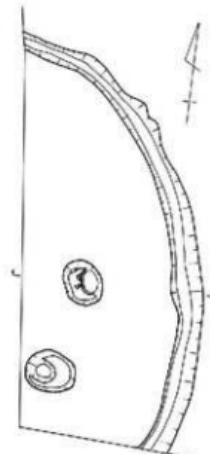
**SK-1** (第25図) 調査区の北西隅で検出した東西に長い楕円形の土塙で、西端部を搅乱されているが長さ1.1m、幅0.5m、深さ35cmを測る。ただ土塙東半はやや浅くなっている。内部には焼土がつまっており、第33図の土器が一括して出土した。

## 2. 出土遺物

### 方形周溝墓出土土器 (第31・32図)

方形周溝墓の各周溝より多量の土器が出土した。器種も壺・甕・高杯・水差・鉢と多岐にわたっている。

**壺** (第31図1~14) 壺は専ら口縁の施文方法によって、口縁面をヘラ、横、凹線もしくは円形浮文で飾るもの(1~7)、無文のもの(8)、口縁下端を指もしくはヘラで波状に仕上げるもの(12・13)、受口



- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. 暗茶褐色粘質土<br>(礫を含む)     | 4. 暗茶褐色粘質土<br>(1より灰色を帯びる) |
| 2. 暗茶褐色粘質土<br>(暗黄色粘質土混入) | 5. 暗茶褐色粘質土<br>(炭混入)       |
| 3. 暗黄褐色粘質土<br>(貼灰か)      | 6. 暗茶褐色粘質土<br>(1より暗い)     |
- 第28図 SB-1 平面図・断面図

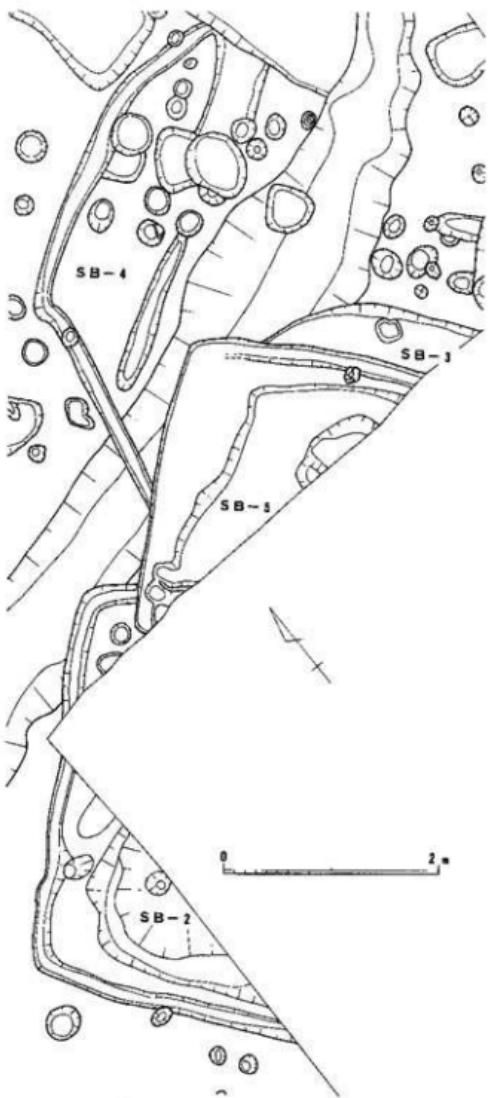


第29図 SK-1 遺物出土状態

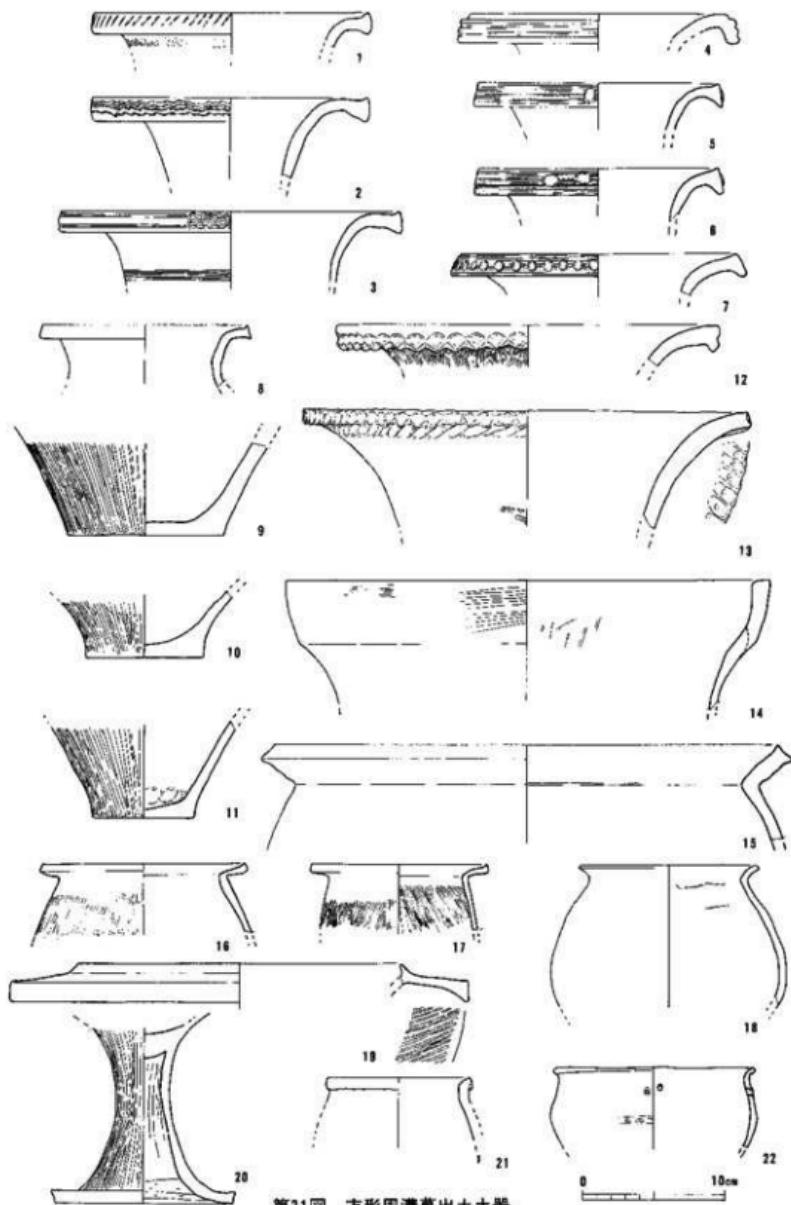
状を呈する大形のもの（14）に分類できる。1は口縁をヘラ状工具で刻むもので北辺より出土した。2は横描波状文を、3は2条の凹線の後に同じく横描波状文を施す。いずれの波状文も原体の条間幅が不ぞろいであったり、口縁上端に平行せずに蛇行して走るなど、稚拙な感は否めない。4～7は端面全体に数条の凹線文を施すもので、5～7では円形浮文も認められる。8は全く無文の土器で、南辺中央部より出土した。煮沸用の甕であろう。12は口縁端面下部に断面V字の原体で刻みを入れた後、その下端面にヘラで断面V字の刻みを施す土器で、頭部外面に粗い刷毛が認められる。13は復元すると口径32cmにもなる。大形の甕で、口縁端面付近に指頭圧痕が認められる。14は外反する頭部から明瞭な稜を形成せずにやや内弯する受口状の口縁が続く壺で、復元口径は35cmに及ぶ。口縁外面に粗い刷毛を施す。なお、図示しなかったが、南辺中央部より内部に朱の付着する壺も出土している。

#### 甕（第31図15～18、第32図23）

甕その他の用途が考えられる  
口径30cmを越す大形の甕（15・  
23）と、煮沸用の口径15cm程の  
小形の甕（16～18）に分類でき

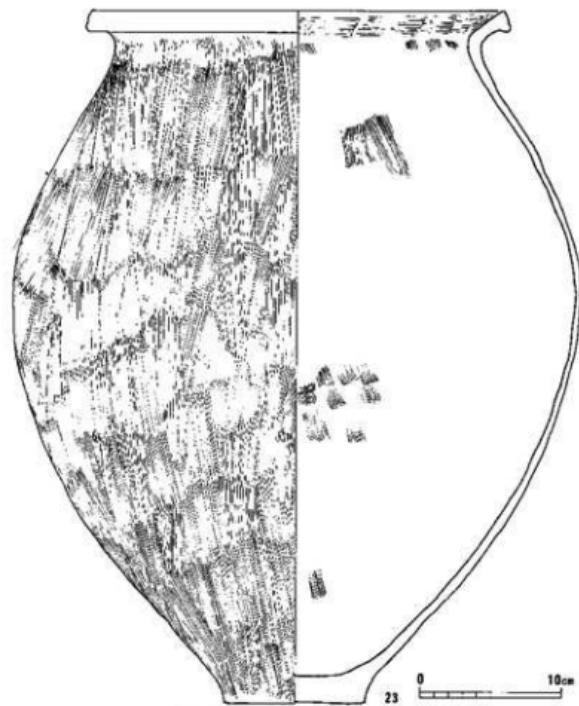


第30図 SB-2～5 平面図



第31図 方形周溝墓出土土器

る。15は復元する  
と口径38cmにも及  
ぶ壺で、全体にく  
すぶった色調を呈  
し、内面は特に黒  
く変色する。23は  
前述したように壺  
枠の可能性が高い  
もので、高さ49cm、  
口径30cm、体部最  
大径40cmを測る。  
体部外面、口縁部  
内面に粗い刷毛を  
施し、内面は細か  
い刷毛が部分的に  
認められる。16・17  
は、ともにつまみ  
上げ状の口縁を有  
し、外面は刷毛で  
仕上げる。17は内  
面にも刷毛が認め  
られる。18は球形  
の体部からやや外反気味に広がる口縁部が続き、端部はわずかに面を形成して終わる。内外面  
とも表面があれており、調査はよくわからないが、明褐色を呈し、雲母を多量に含む生駒西麓  
産の胎土を有している。口径13.2cm、体部最大径17cmを測る。



第32図 方形周溝墓出土土器

高杯 (19・20) 19は復元口径32.5cmを測る高杯Bの口縁部で、端部は垂下させず、肥厚させて端面を形成する程度にとどまる。水平部の内外面および端面にヘラミガキを施す。20は杯  
部から外反してのびる脚部で端部は面をなして終わる。外面は縱方向のヘラミガキ、裾部内面  
にヘラケズリが認められる。裾部径は12.8cmである。

無文土器他 (21・22) 21は復元口径10.6cmになるとみられる土器で、球形の体部からゆる  
やかに口縁部に続き、端部は肥厚して終わる。外面はにぶい赤褐色、内面は黒色を呈し、口縁  
内外には指おさえの跡がみられる。22はやや腰の張った体部から短く外反する口縁部に続く  
薄手の鉢形の土器で、にぶい橙色を呈し、復元すると口径14.2cmになると考えられる。体部上半に内面より2ヶ所穿孔がなされ、おそらく2孔一対になるとと考えられる。口縁端部は短く

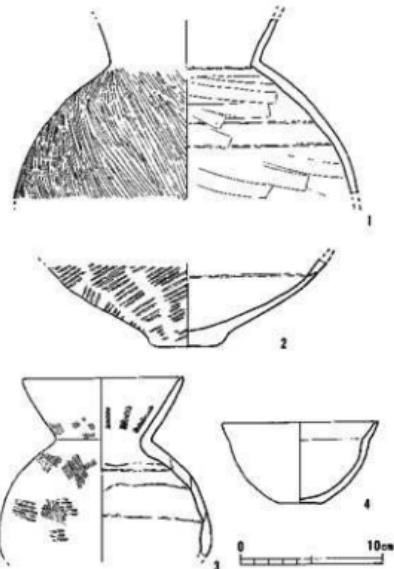
外反し、面をなして終わるが、部分的に折り返し状に肥厚させて終わる部分も認められる。体部外面の一部にヘラミガキが施される。21は朝鮮半島に分布する無文土器とみられ、胎土も在地のものと趣きを異にする。22は、畿内の弥生土器にも日本で出土した無文土器にも知られない器形であるが、前述した口縁端部の形態は無文土器の影響をうかがわせる。ただ、22の胎土は在地のものと考えられる。

**S K - 1 出土土器** (第33図) 1は直口の盃と考えられるもので、内外面とも淡橙色～橙色を呈し、体部外面は斜め方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ調整を施す。なお、体部内面に4条の接合痕が認められる。頭部径10.6cmを測る。2は縄の底部で、外面灰色、内面灰褐色を呈し、外面はタタキの後、ナデを施す。底部径5.6cmを測る。3は口径11cmの直口の盃で橙色～にぶい橙色を呈し、外面はタタキの後、刷毛で調整し、頭部内面にも刷毛は認められる。体部内面は指オサエ痕が認められ接合痕も明瞭に残る。4は小形の鉢で橙色～淡橙色を呈し、半球状の体部からやや内寄り気味に外傾する短い口縁部が続く。口径11cm、高さ5.7cmを測る。ほぼ全面にわたって摩滅が激しいが、口縁部はヨコナデを施す。これらの土器は、後期中葉から後半にかけての特徴を示している。

#### 石器

**打製石鎌** (第34図1～7) 17点を検出した。そのうち代表的なものを図示した。1は重量2.7gを量り、畿内の平基式石鎌としては大型の部類に属する。2は重量1.9gを量る。円基式の3・4は、それぞれ重量1.9g、2.25gを量る。5は小型の尖基式で重量は1.3gである。6は大型、厚手の円基式で重量5.25g、厚さ8.2mmに達する。7は小型の有基式で重量は1.5gを量る。以上のうち5が1号主体部から、7が3号主体部から検出された。その他は包含層、ピット、周溝などからの出土である。

猪名川流域の弥生時代石鎌は、これまで細かい時期の限定ができるものが少なかったが、今回出土の資料はそれが可能であり、貴重なものといえる。この地域では、中期に至っても、有茎式の比率が畿内南部に比べて低いことが從来より指摘されていたが<sup>5)</sup>、今回出土の資料にお

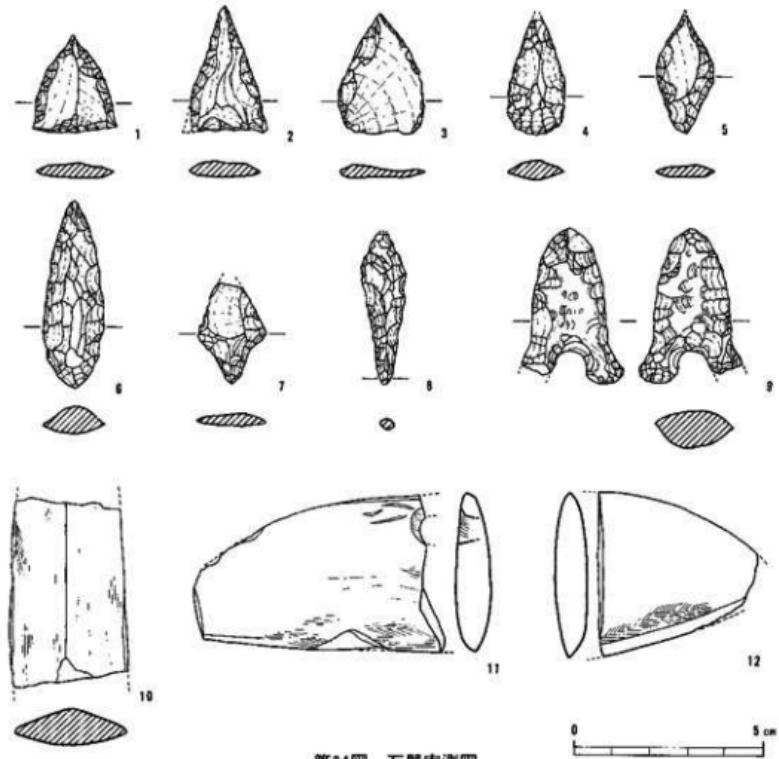


第33図 SK-1 出土土器

いても有茎式は3点を数えるにとどまり、この指摘を裏付ける。また、6・7以外は両面または片面に大剥離面を残し、扁平なつくりである。こうした傾向は勝部、田能などこの地域の採点集落の資料においても同様であり、大剥離面を残さない厚手のものが多い畿内南部に対するこの地域の特色を示すものといえよう。なお、肉眼観察によれば、石材はすべてサヌカイトを使用している。

**打製石錐 (8)** 片面に大剥離面を残す棒状の石錐であり、福井英治による分類ではⅠ類に属する。このほか、Ⅲ類に属するものも含め、7点を検出した。<sup>6)</sup> 肉眼観察によれば、石材はすべてサヌカイトである。

**局部磨製異形石器 (9)** 周溝内より1点が検出された。縁辺部より細かい調整剝離を重ねることにより整形したのち、両面の中央部付近を研磨している。石材は淡緑灰色のチャートで、黒褐色の脈が入るが半透明で美しい。この種の石器は、通常、縄文早期の押型文土器に伴うものとされ、この例もその時期のものと考えられるが、それを示す土器片は一点も検出されなか



第34図 石器実測図

かった。

**磨製石劍（10）** 上下端を大きく欠失する。両面とも長軸方向に研磨するが、稜は片面にしかみられない。石材は肉眼観察によれば黒色頁岩と思われる。

**磨製石庖丁（11・12）** 11は半分程度を欠失する半月形直線刃の石庖丁である。紐穴はごく一部を残すのみで、その穿孔方法はよくわからない。長軸方向または斜方向の研磨を施す。肉眼観察によれば墨灰色の泥岩を使用している。12は約3分の2を欠失するが、半月形外弯刃の石庖丁と思われる。長軸方向または斜方向に研磨している。淡黄灰色を呈し、肉眼観察では泥岩のように思われる。

## V. まとめ

1986年度は15~18次と4次にわたり、いずれも個人住宅の建設に伴う調査を実施してきたわけであるが、これまでの知見もまじえて新免遺跡の概略をみてみたい。

**縄文時代** 新免遺跡の時期が縄文時代にまで遡ることは11次調査で石鏃、磨製石斧、晚期突帯文土器などが出上していたことから明らかであったが、18次調査で新たに局部磨製圓形石器が出土した。この石器は押型文土器と共にことが知られ、新免遺跡の始まりが一挙に早期にまで遡ることが確実になった。残念ながら今までの調査で縄文時代の遺構は検出してないが、今後住居址などが確認される可能性は高いと言えよう。

**弥生時代** 前期の遺構・遺物は確認していない。中期初頭(II様式期)になると14次調査で方形周溝墓を確認しており、集落の存在したことは確実であるが、14次調査以外では2次調査で若干の土器が出土している程度であり、現状では詳細は不明としか言いたくない。

**中期中葉~後半(III~IV様式期)** の遺構・遺物は量の多少はあるものの殆どの調査地点で確認しており、当時の遺跡の範囲は東西500m、南北400mの現在の下井町2~4丁目のほぼ全域にわたると考えられる。台地の縁辺部にあたる西部と北部に集落が形成されていたようであり、11・16・18次調査では竪穴式住居址も検出している。また、13次調査でこの時期の方形周溝墓を検出し、台地のやや奥まったところに墓地の形成された可能性が指摘されたが<sup>77</sup>、18次調査で検出された方形周溝墓は縁辺部に近く、住居址とも切り合っており、墓地の形成にあたっては厳格な選地などは行なわれなかつたのかもしれない。ただ、台地縁辺部に集落が形成されたのは、おそらく台地の直下に存在したであろう水田への距離に規制されたのであろう。

なお、16・18次調査地点では調査面積が狭いにもかかわらず多くの石器が出土し、石鏃に限っても各々の調査地点で10点を超えている。16次調査地点の遺構堆土および包含層中よりサヌカイトのフレイク・チップが、北端の焼土より原石が出土していることもあわせて考えると、産出地より原石に近い形で運ばれてきた石材をもとに自給的規模を大きく上回ることはないにせよ石器製作を行っていたことがうかがえる。

**弥生時代後期**の新免遺跡は、方形周溝墓こそ確認しないものの、中期同様集落は台地の縁辺部に當まれたようであり、11次調査では4基前後の竪穴式住居址を確認し、18次調査で検出したSB-2・4・5も後期の可能性がある。

新免遺跡は、以上のように弥生時代中期中葉から後期にかけて非常に発展した集落である。また、他地域との交流を示す遺構・遺物が散見されるのも新免遺跡の特徴の一つである。例えば、11次調査で出土した人面付土製品、あるいは18次調査の無文土器は各々吉備地方、朝鮮半島との結びつきを示す遺物である。特に後者は管見による限り大阪では2例目であり、注目すべき遺物である。また、18次調査で検出したSB-4が平面多角形の住居址であるならば、それも西方の影響を考慮しなければならないであろう。なお、南方に位置する山ノ上遺跡からも

小形彷製鏡が出土しており、同様の性格を考えられるかもしれない。

**古墳時代** 古墳時代も台地の縁面部を中心に集落が形成されたようであり、17次調査で検出したSB-1は須恵器の出現する前後のものと考えられ、間仕切りの溝を持つなど構造上も注目すべきものである。後期に属すると考えられる擧立柱建物は北部の11・15次調査で検出してい

いる。  
なお、16・17次調査では滑石製の白玉を中心とする玉類が出土している。それらの中には、わずかではあるが未成品を混じており、生産地との関係をもっていた可能性もある。

**奈良時代以降** 弥生時代・古墳時代にわたって東落が営まれた新免遺跡も奈良時代以降は、人々の生活の痕跡は11次調査で検出した奈良時代の井戸と平安時代の土塙墓を除くと殆ど皆無と言ってよい。明治時代の地形図（第1図）を見ても大部分が水田と化している。おそらく、奈良時代から中・近世を通じて新免遺跡の地が、生活の場として顧みられることは殆どなかつたのではないだろうか。

註1)「弥生式土器集成」本篇2)

2)木下亘「摂津櫛井谷古窯跡群における須恵器編年」（「櫛井谷古窯跡群2・17窯跡」）

3)同 上

4)→註1)

5)佐原真「考古学からみた伊丹地方」（「伊丹市史」第1巻）

6)「川能遺跡発掘調査報告書」

7)「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1985年度・1986・3

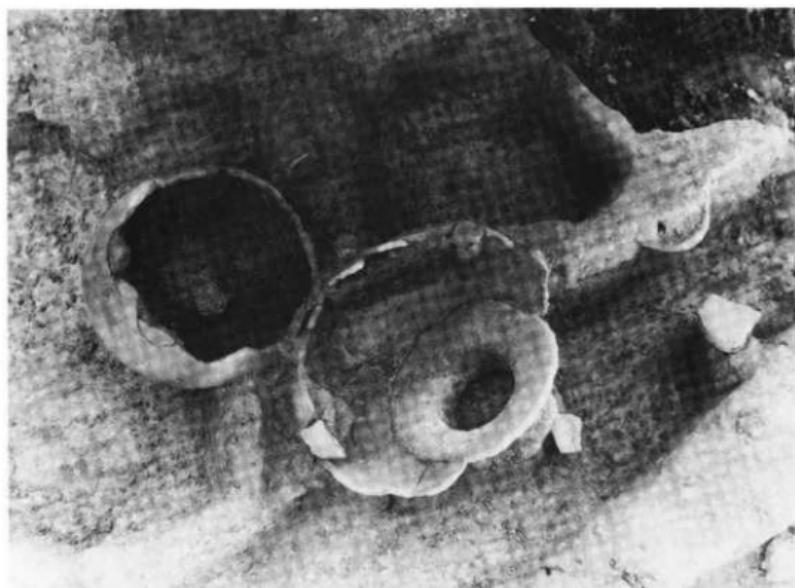
# 図 版



(1) 調査区全景（北東より）



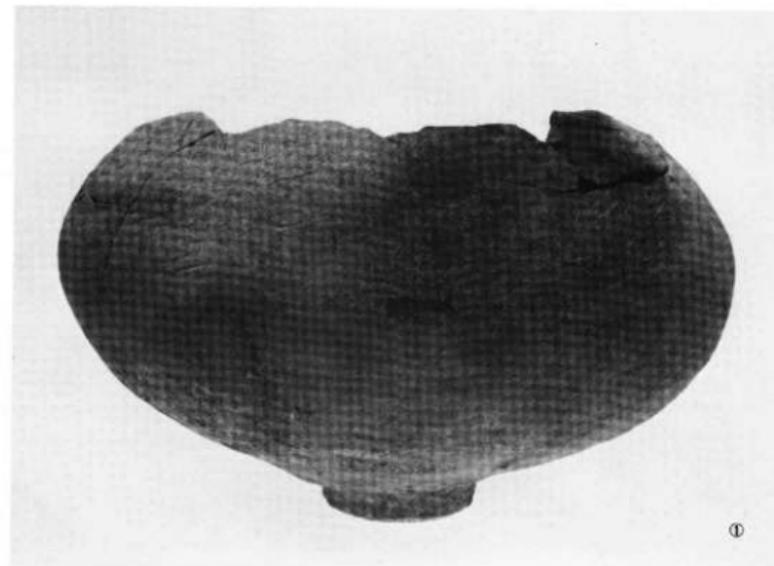
(2) 調査区全景（東より）



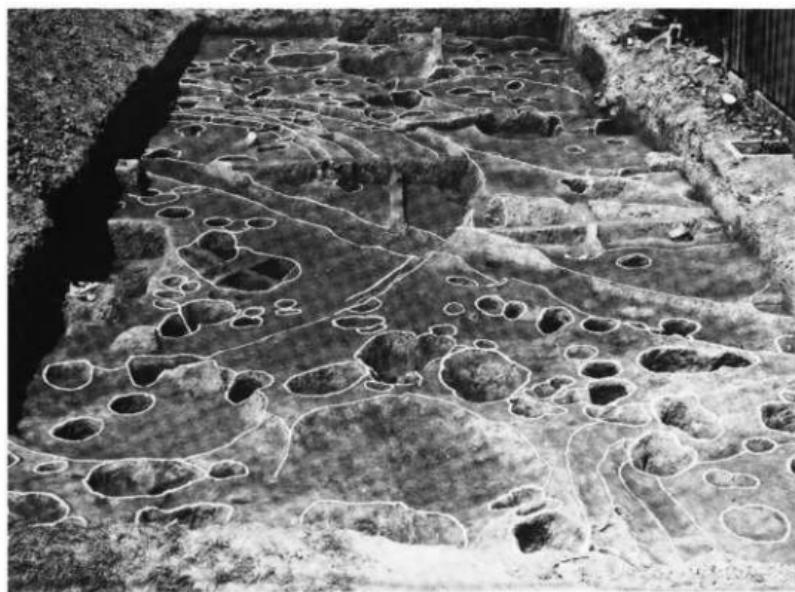
(1) SD-1 遺物出土狀況



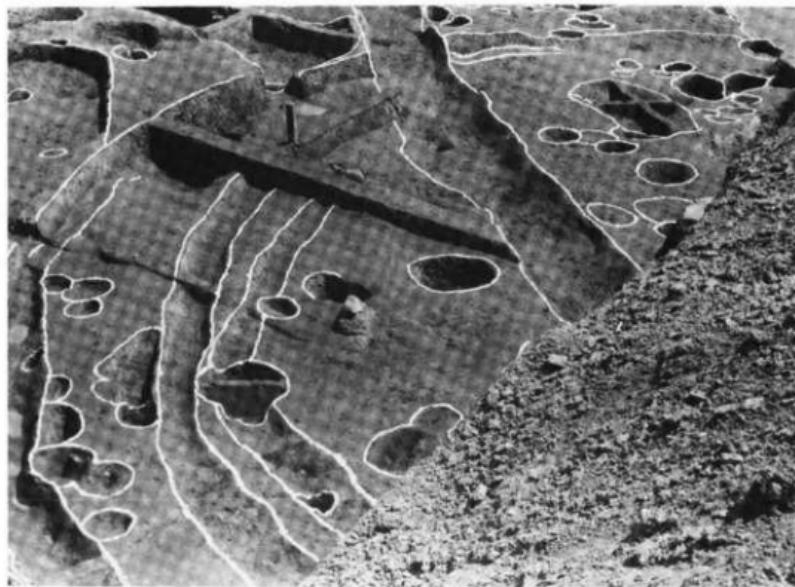
(2) SD-5 遺物出土狀況



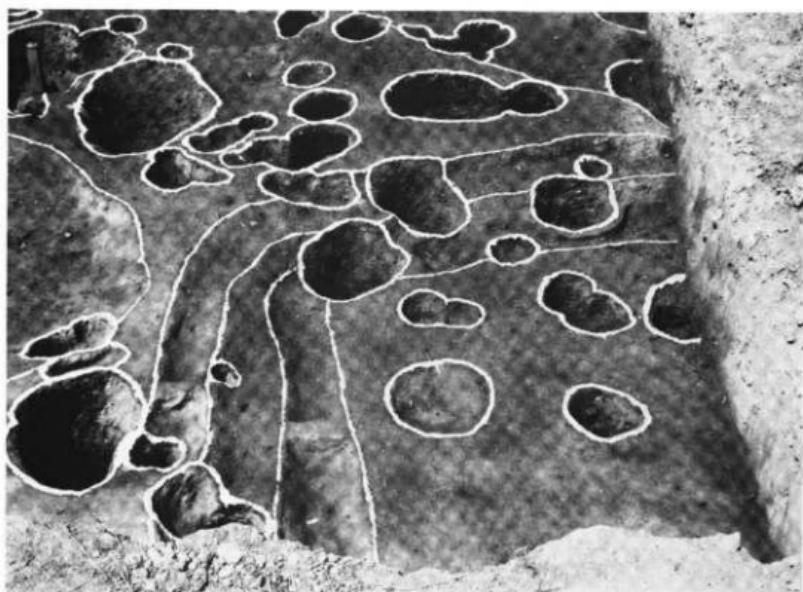
1·2 : SD-1 出土土器



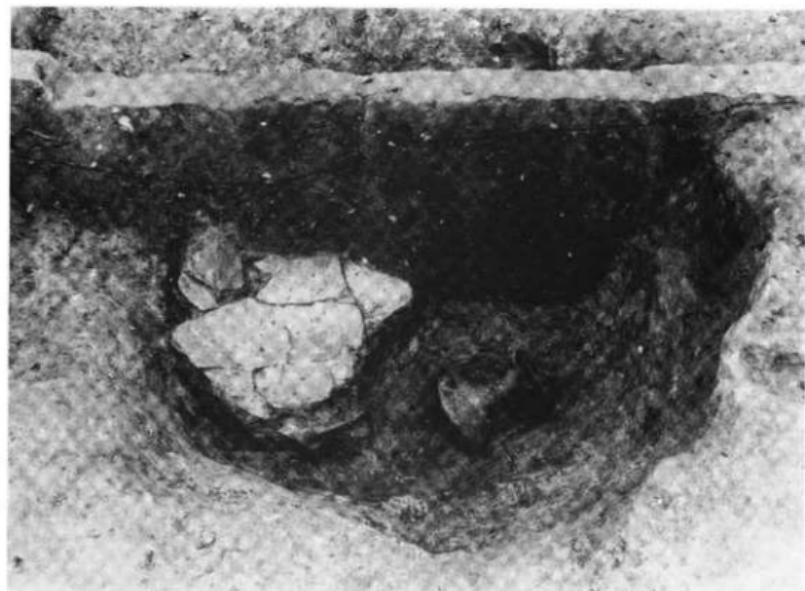
(1) 遺構全景（南より）



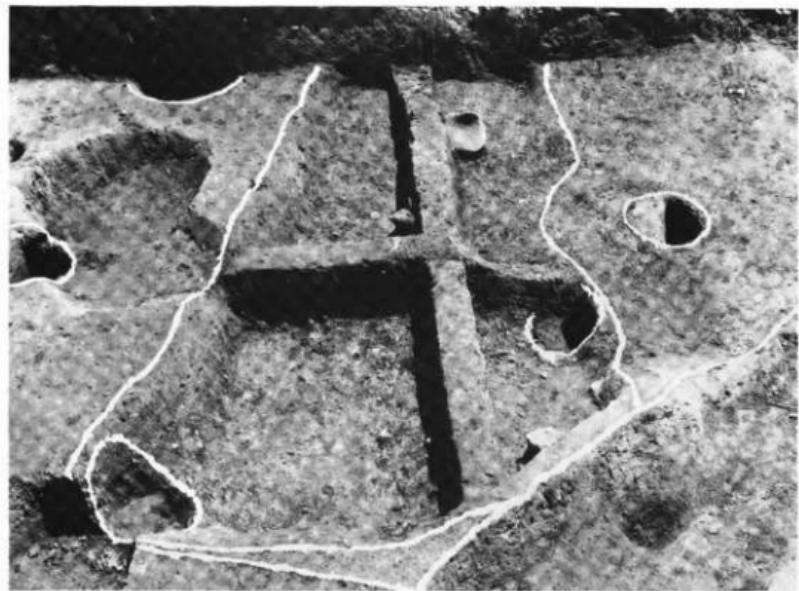
(2) SB-1 検出状況



(1) SB-2 檢出狀況



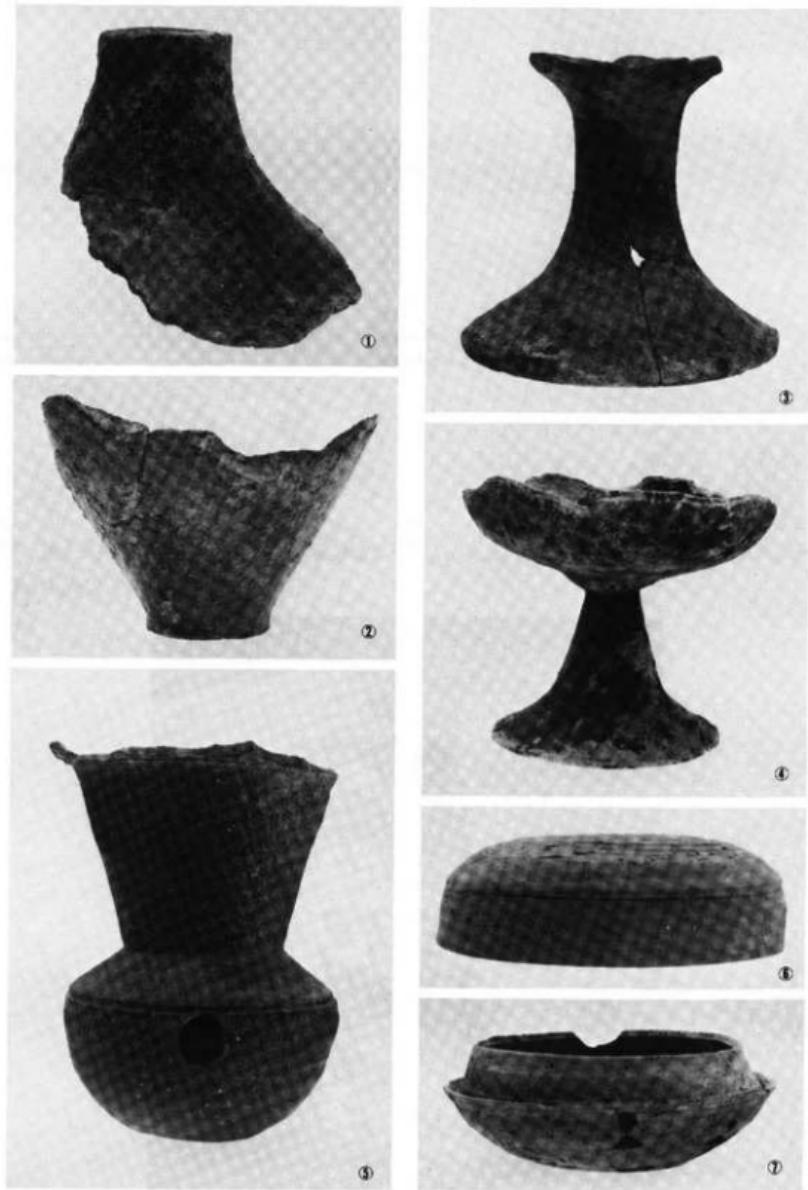
(2) SP-141 檢出狀況



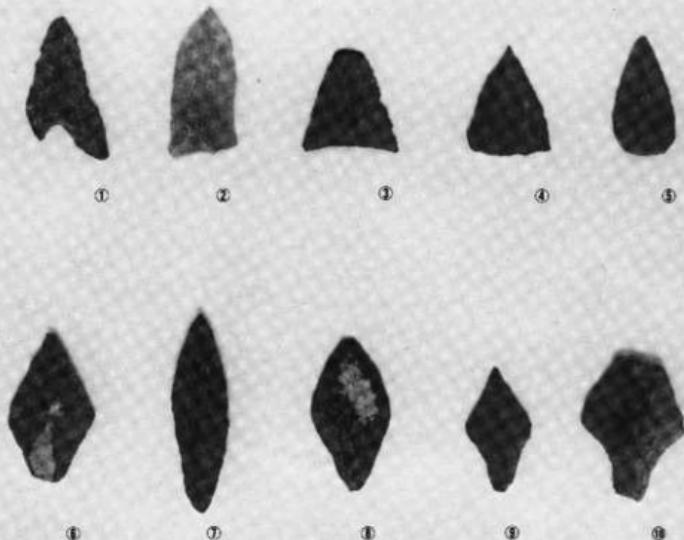
(1) SK-4 檢出狀況



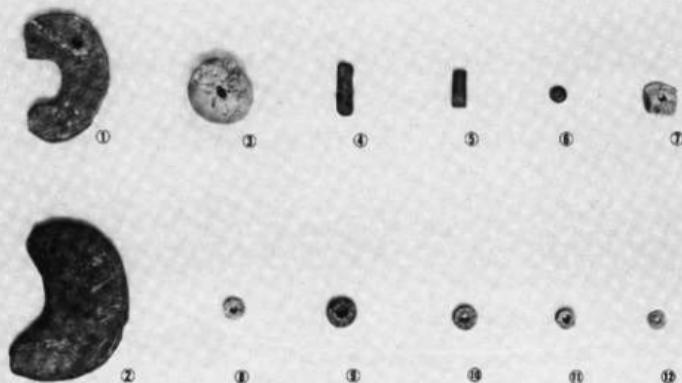
(2) SD-1 檢出狀況



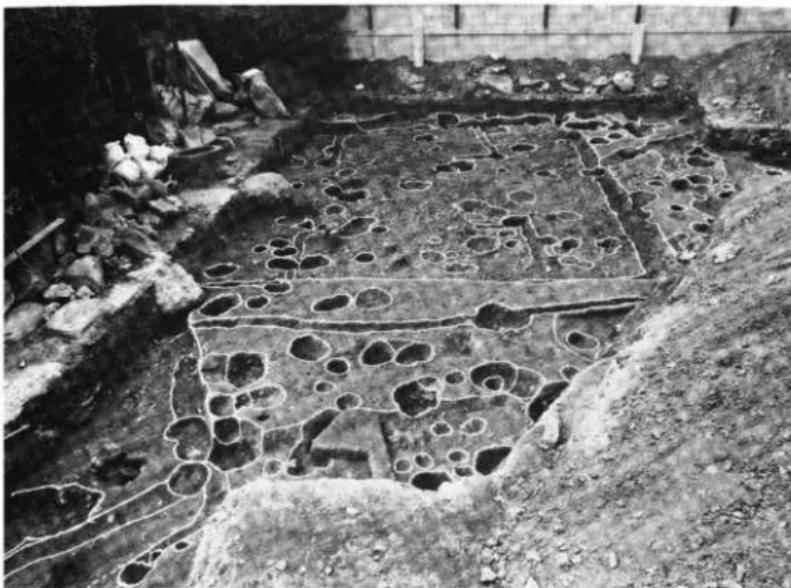
1 : SK - 4, 2 + 3 : SP - 141, 4 : SB - 1 (上層), 5 : SK - 3, 6 + 7 : SD - 1



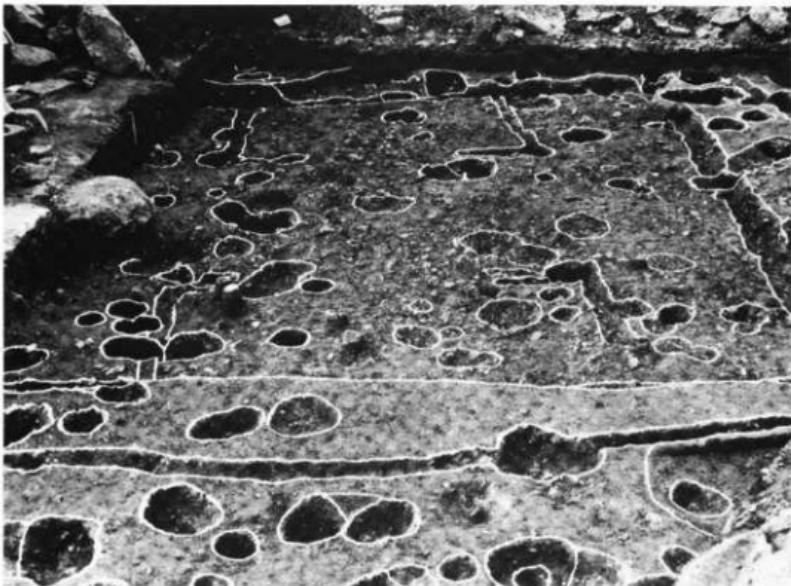
(1) 石器 (1 : SK-1, 4 : SK-2, 6 : SD-1, 7 : SP-141, 8 : SP-188,  
2~3·5·9~10 : 包含層)



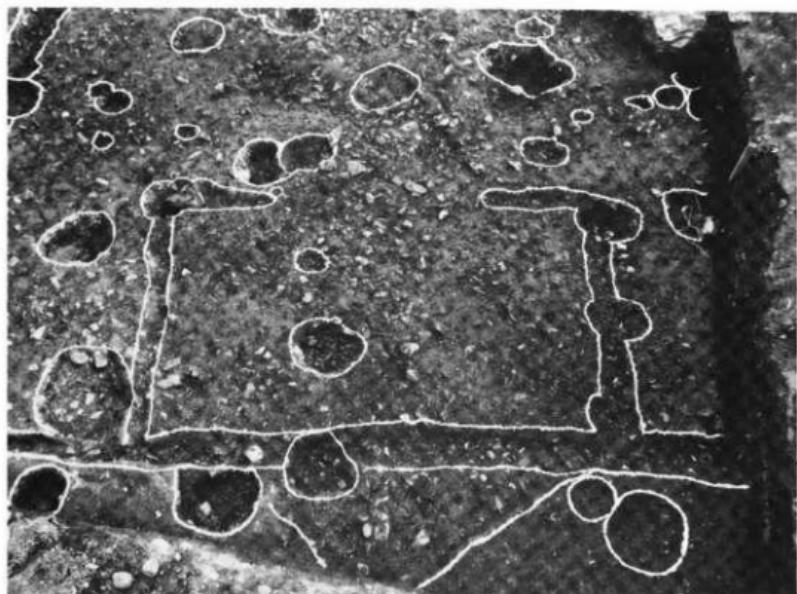
(2) 玉類 (1·7 : SK-2, 3·8 : SK-3, 4~6·9~12 : SD-1)



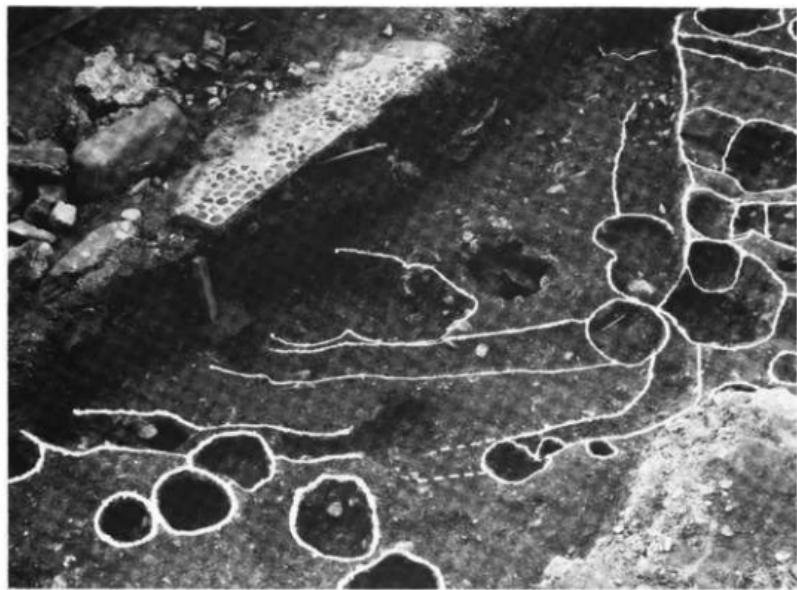
(1) 遺構検出状況（東より）



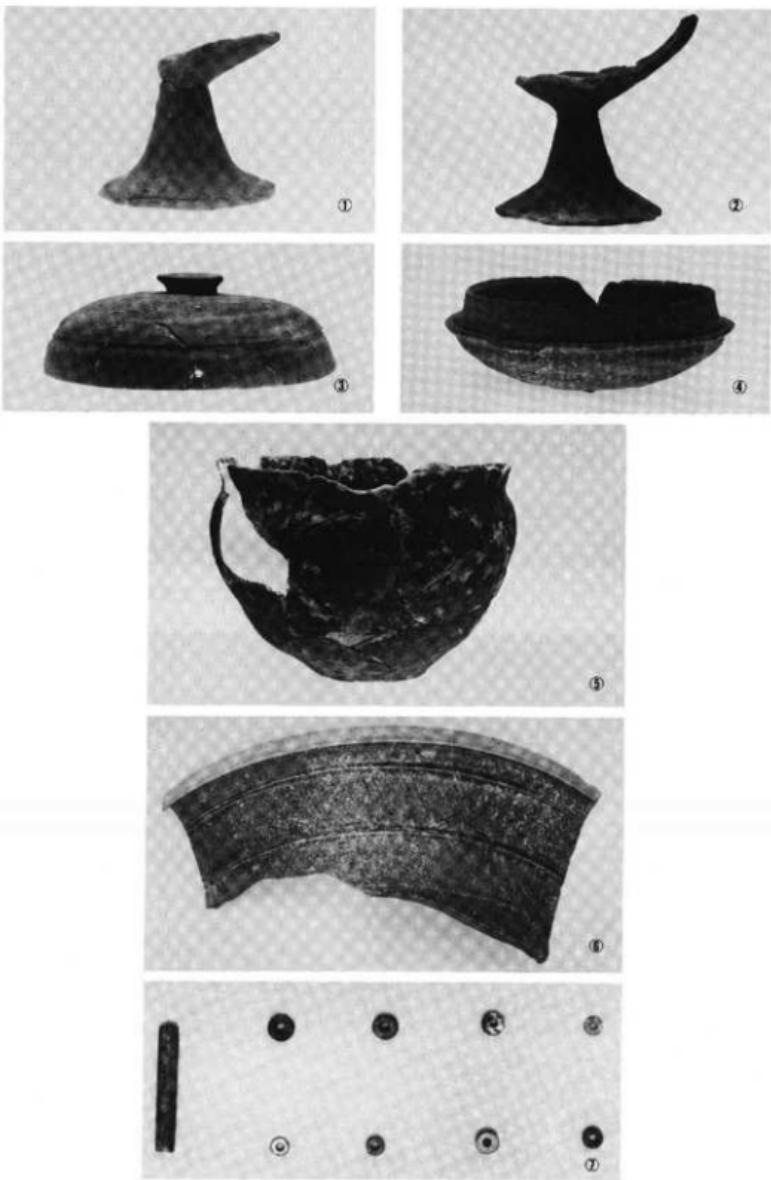
(2) SB-1 検出状況（東より）



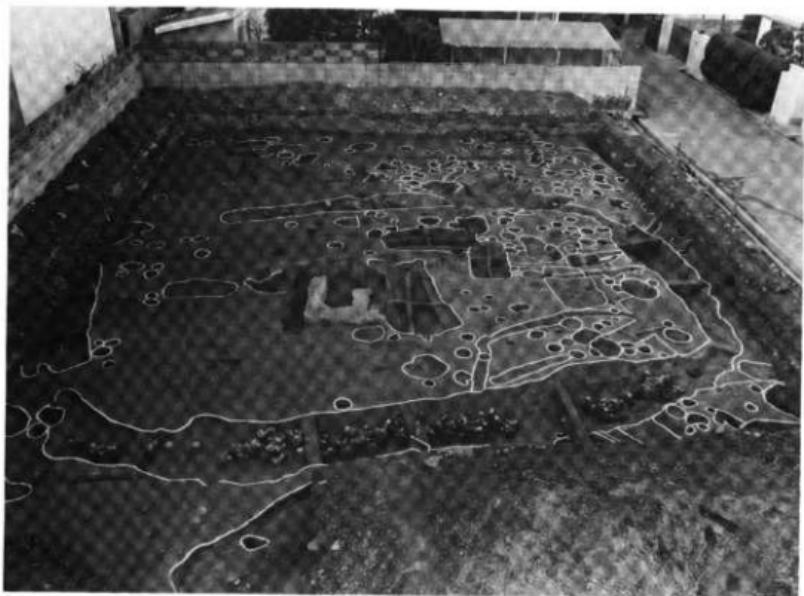
(1) SB-1 西側小室部（西より）



(2) SB-2 検出状況（東より）



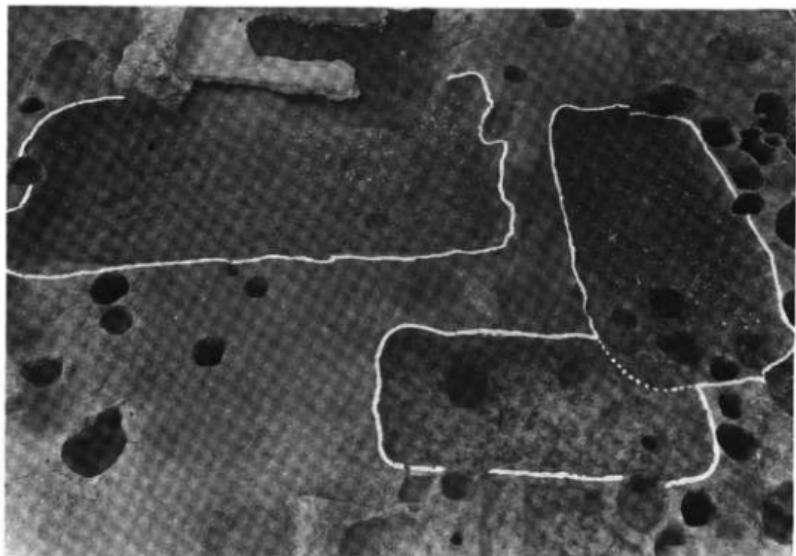
1·2·5: SB-1, 3: 包含層上面, 4·6: SK-6, 7: 玉類



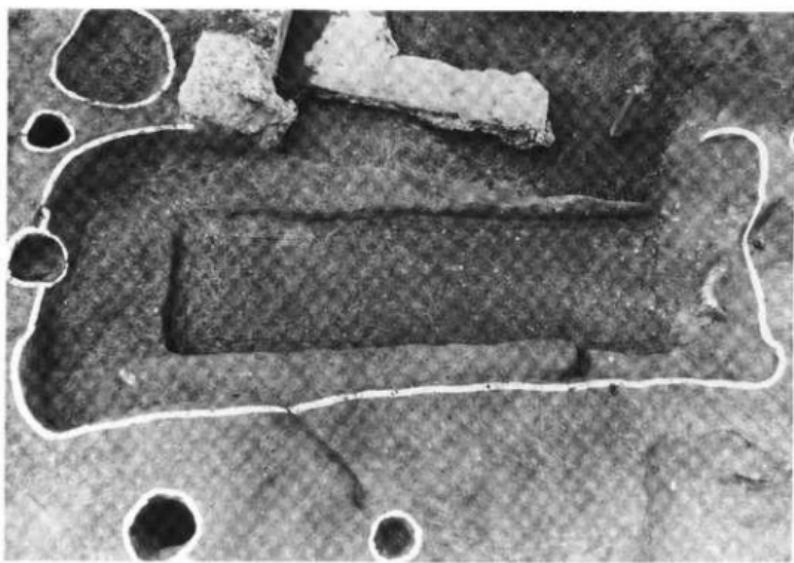
(1) 調査区全景（南より）



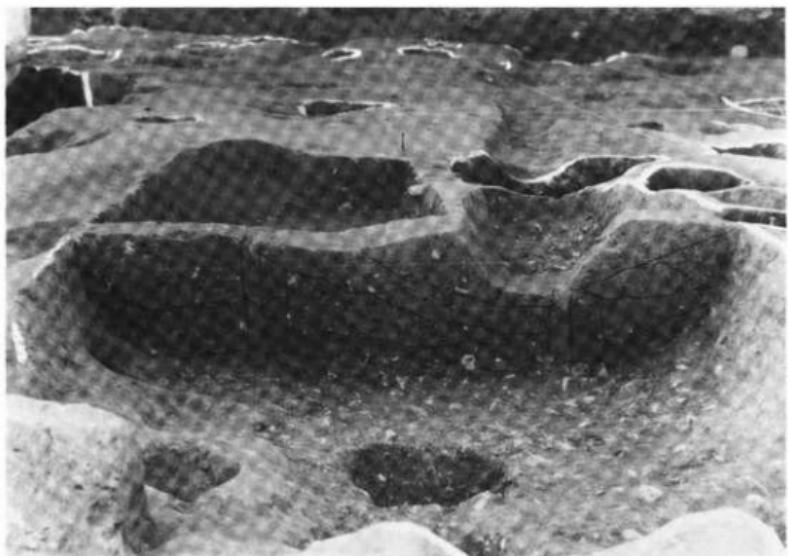
(2) 方形周溝墓遺物出土状況



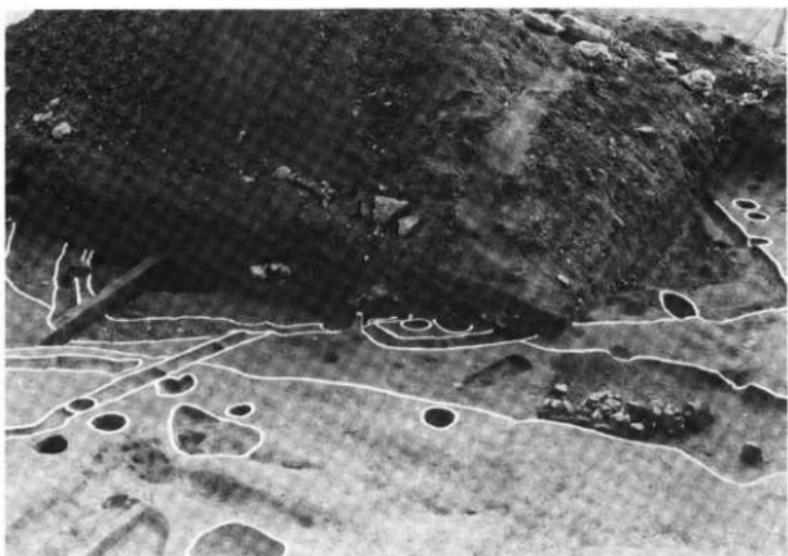
(1) 方形周溝墓 1 ~ 3 号主体部



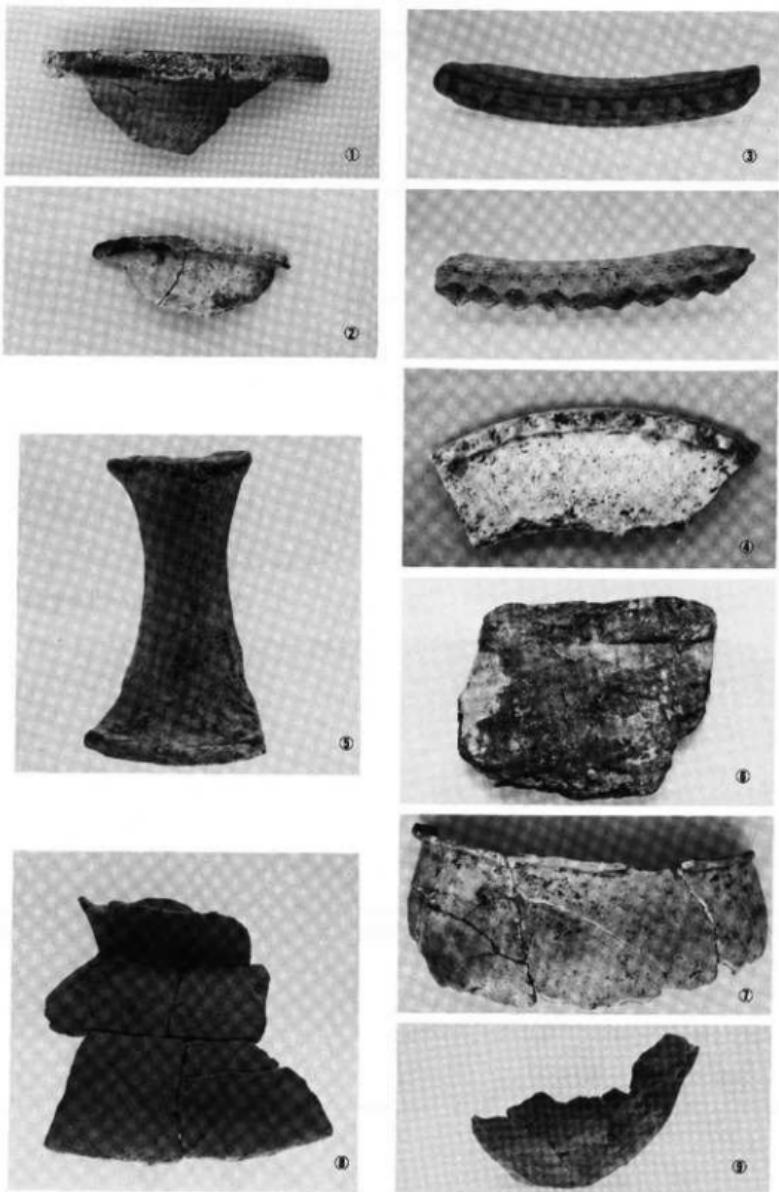
(2) 方形周溝墓 1 号主体部



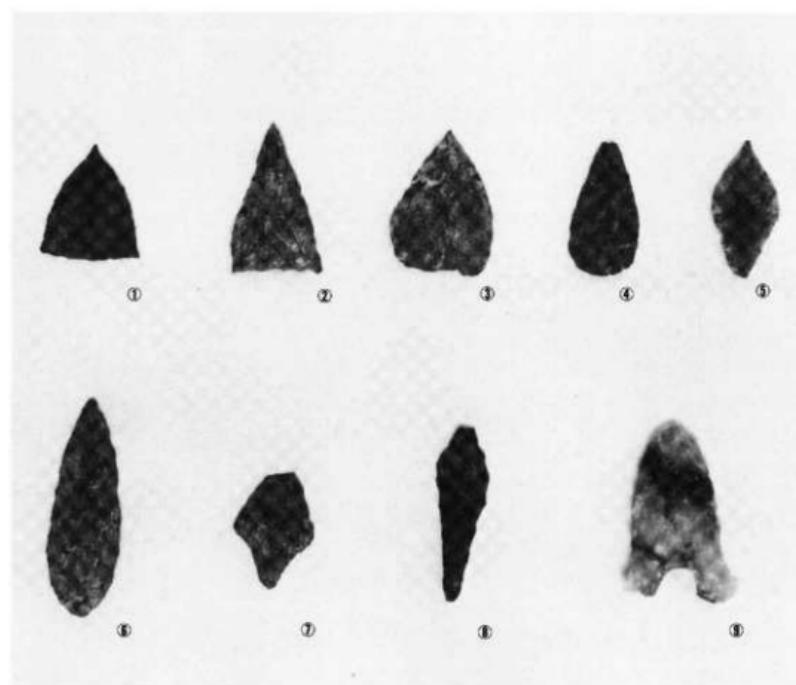
(1) 方形周溝墓 1号主体部東西断面



(2) SB-2・5検出状況



1~7：方形周溝墓（1~4：壺，5：高杯，6·7：無文土器系土器）8·9：SK-1



1 ~ 7 : 打製石鎚, 8 : 打製石錐, 9 : 局部磨製異形石器, 10 : 磨製石劍, 11 ~ 12 : 磨製石庖丁



# 本町遺跡第3次調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、豊中市本町3丁目13-38において実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 調査期間と調査面積は下記のごとくである。
  - 調査期間 昭和61年4月30日～同年5月17日
  - 調査面積 47m<sup>2</sup>
3. 調査は本市教育委員会社会教育課文化係が実施し、柳本照男が現地を担当した。
4. 本書の執筆、及び編集は、造構の概要を柳本、出土遺物を災野豊子が担当し、編集は共同で行った。
5. 土地所有者飯田重樹氏には、調査の実施に際し、多大なる御理解をいただいた事に対して深く感謝いたします。

## 目　　次

I. はじめに.....	57
II. 調査の概要.....	57
III. 出土遺物.....	59

## I. はじめに

本町遺跡は、昭和58年に建築工事に伴う立会調査で初めて確認された遺跡で、阪急宝塚線難中駅の東方一帯の台地上に広がる遺跡である。今まで5回の調査を実施し、造構、及び時代も多岐にわたり、弥生時代から平安時代に至る複合遺跡であることが確認されている。

本町遺跡と命名した第1次の調査では、古墳時代後期の掘立柱建物跡と溝状造構が検出され上馬等が出土している。第2次調査では、溝状造構から焼け歪みの須恵器が投棄された状態で出土している。このことは北東部に広がる桜井谷窯跡群との関係が窺える。第4次と第5次の調査では、新たに弥生時代中期と後期の略穴式住居と平安時代の造構が確認され、造構も東方に広がる現象がみられる。また、東側の一段高い台地には7世紀中葉すぎに創建の余寺山魔寺（新免魔寺）が控えるなど古墳時代後期から奈良時代前期にかけて中心地であることが推定される遺跡である。

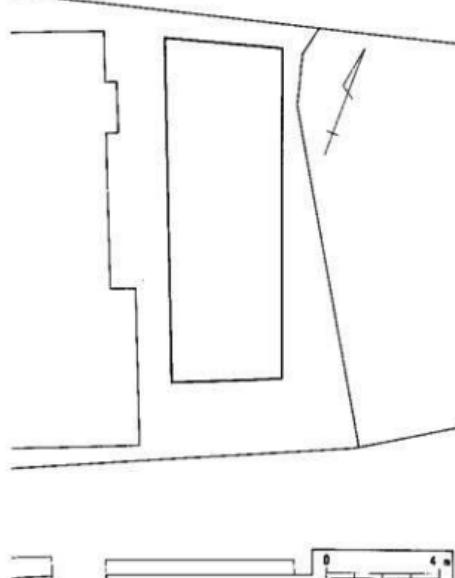
## II. 調査の概要

基本層序は4層に大別できる。第1層は表土、第2層は灰黄褐色砂質上で畠地の床土と推測される。第3層は茶褐色粘質土で細片の土器を含む。第4層は黒色粘土層で古墳時代後期の包含層である。

造構は、第2層上面から検出したSK-1を除き、他のものはすべて第4層上面の地山面で検出したものである。以下、主要な造構について記述する。

**SK-3** 南東部で検出したものである。短径0.9m、長径は東壁内に延びるため定かでないが検出状態で1.1mを測る。深さは0.45mを測り、断面U字状を呈する。第4層上面から検出したもので須恵器、土師器等が出土している。

**SK-5** 北西部で検出したもので、これも同じく第4層上面から検出したものである。西壁にかかるた



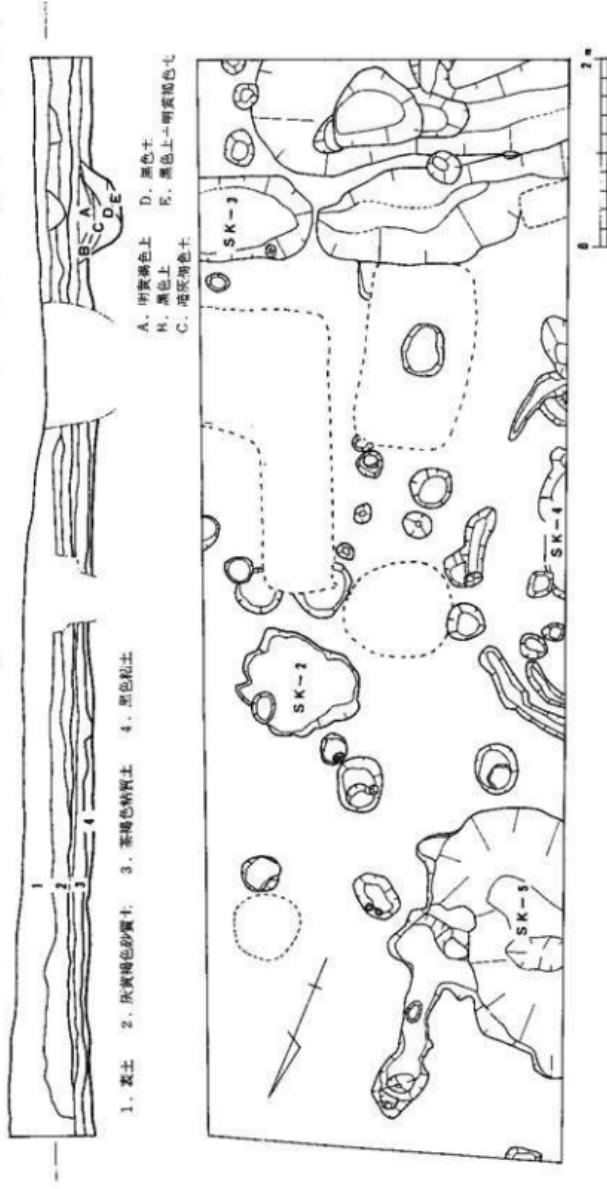
第1図 調査範囲図

め全形は知り得ないが、現状で短径 1.3 m、長径 2.6 m を測る不定形なものである。深さは最深部で 0.7 m を測り、堆積埋土は粘性の強い黒色土層である。

他の土塙は不定形で浅いものばかりである。

溝状遺構 南部においては、第2図に示すように東西方向に走る2条の溝状遺構を検出した。南側のものはコ一ナ一部分とみられ、南方に幅を増すことが窺える。堆積埋土は黒色土を基色とするが、礫を多く含み埋められた状態が観察された。遺物はすべて須恵器である。

中央部の西壁付近では、弧状を描く遺構がと



第2図 平面図・断面図

ぎれながらも検出された。おそらくは円形の竪穴式住居の周溝とみられるが、上器が出土していないので時期は確定できない。

**柱穴** 径20cm前後のものから径50cm前後のやや大きめのものまで検出された。平面形は円形で、深さも10cmから60cmを測るものまでみられる。大きめの柱穴は西方に延びる建物が推定されるが現状の範囲内では消滅しているものもみられるので確定はできない。

以上極く簡単に述べてきたが、主な遺構はすべて古墳時代後期のものである。第4層上面で検出したものと地山面で検出したものとでは、ほとんど時期差は認められない。また、第4層の包含層は古墳時代後期の遺物で占められている。

### III. 出土遺物

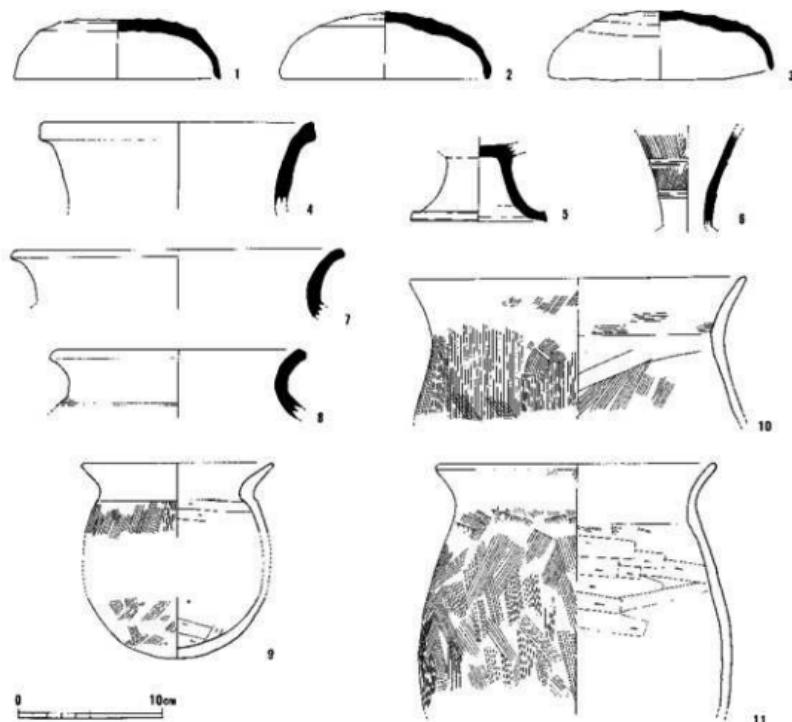
**SK-1** (第3図 9・11) 9は口径13.4cmの小型の甕である。口頭部は一旦短く内傾した後、口縁部は外反する。球形に近い体部に丸底を有するものである。口縁部は横ナデ、胴部から底部にかけて外面は斜め方向のハケ、内面は斜め方向のヘラケズリが施され、一部輻方向のものもみられる。焼成は良好でにぶい赤褐色である。胎土に1mm内の砂粒を多く含む。11は口径19.0cm、残存高17.3cmの甕である。口縁部は横ナデ、胴部外面は斜め方向のハケ、内面はやや斜め方向のヘラケズリが施されている。外面に一部煤が付着している。橙色で焼成は良好である。胎土中に1~2mmの小石を多く含む。

**SK-3** (第3図 1~7・10) 1は口径14.2cm、器高4.3cmの杯蓋で灰白色を呈し焼成はあまい。胎土は密だが砂粒を多く含む。天井部に回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデである。口縁端部は丸く仕上げられ段はない。2は口径14.4cm、器高4.7cmの杯蓋で灰色を呈し焼成はあまい。天井部は丸みをもつ。1/2ほど回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデを行っている。口縁端部は丸く仕上げられやや内傾している。3は口径15.8cm、器高5.9cmで焼け歪みがみられる。黒灰色で外面の一部口縁に沿って赤褐色に変化している。1/2ほど回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデを行っている。1~3は、いずれも天井部の内面中央部に回転ナデのうち一定方向に指ナデがみられる。4は口径19.0cm、残存高5.7cmの甕である。全面に自然釉がかかっている。外反する頸部を口縁端部で肥厚させている。5は底径9.6cm、残存高5.4cmの短脚高杯の脚部である。灰色で断面内部は紫色、外面に一部自然釉がかかっている。6は残存高6.7cmの甕の頸部である。灰色で焼成は良好である。頸部の残存部上半に棍棒のハケメ状の櫛描文を入れたのち、文様帶の下部に2条の凹線を巡らしている。この凹線の間に櫛描列点文を施す。内面は回転ナデを施す。胎土は微砂粒を多く含む。7は復元口径22.8cm、残存高3.8cmの甕である。灰色で焼成は良好である。口頭部は外反しながら上外方にのび口縁端部は丸みをもった面を成す。10は口径23.6cm、残存高10.2cmの甕である。外面の口縁部から口頭部にかけては斜め方向のハケの後横ナデ、胴部は輻方向のハケで一部斜め方向のハケが施されている。

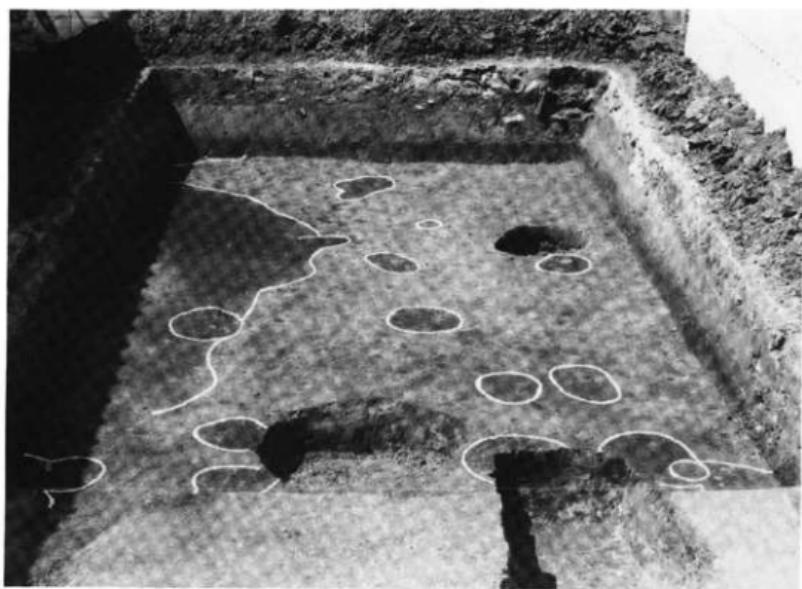
内面の口縁部から口頭部にかけては横方向のハケの後横ナデ、口頭部から胴部にかけて横方向のナデ、胴部は斜め方向のハケが施されている。橙色で焼成は良好である。

包含層(8) 復元口径16.8cm、残存高4.8cmの甌である。口頭部は上方にのびた後外反する。端部は丸味をもった面を成す。口頭部外面にカキメが施されているようである。灰白色を呈し焼成はあまく軟質である。他にも土器は出土しているが、岡化し得るものはなく掲載していない。

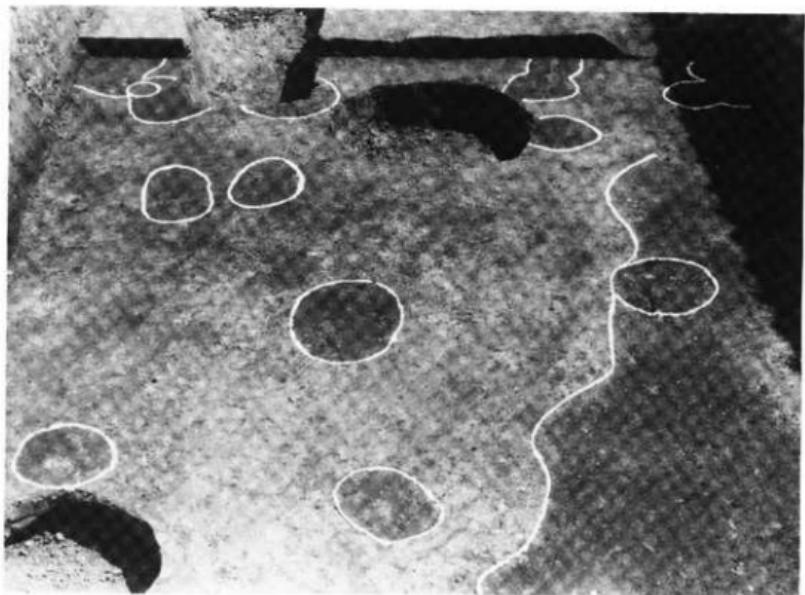
以上、これらの遺物のうち須恵器は桜井谷古窯跡群における須恵器編年II型式3段階に位置づけられると思われる。



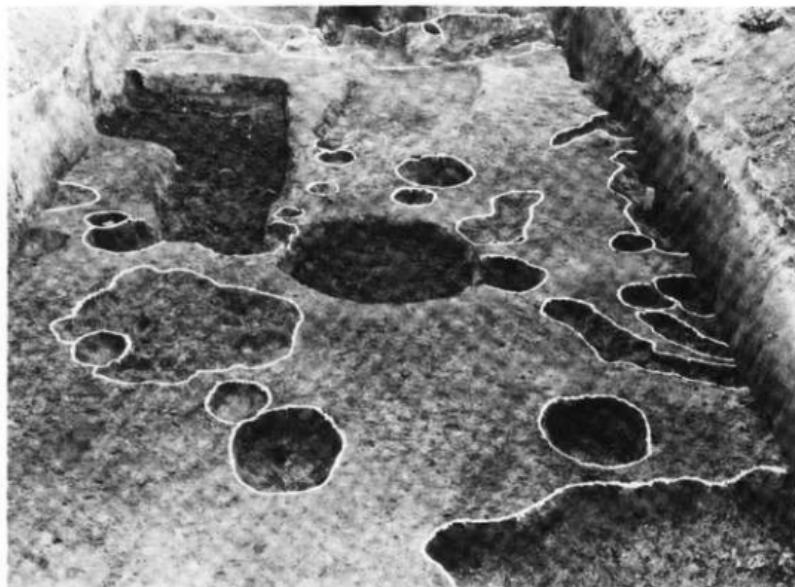
第3図 出土遺物実測図



(1) 遺構検出状況（北側）



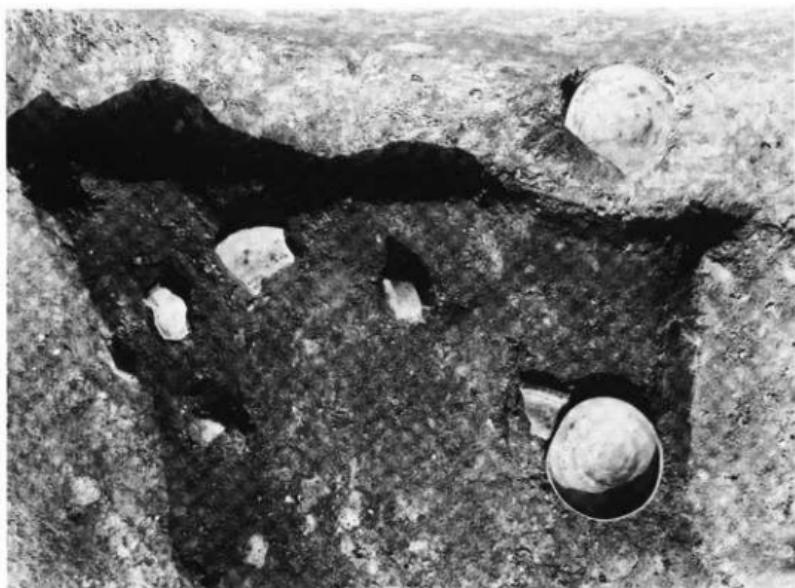
(2) 遺構検出状況（北側）



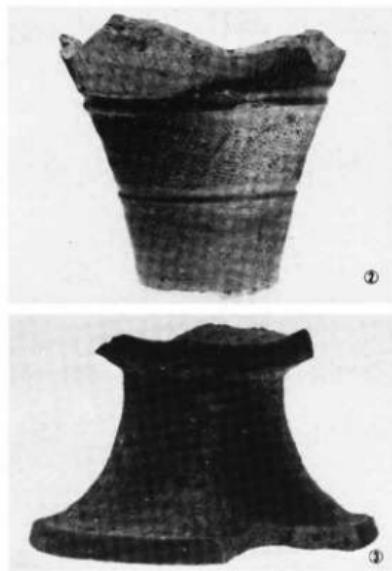
(1) 遺構検出状況（南側）



(2) 溝状遺構



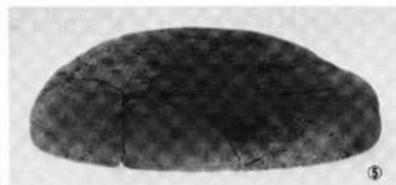
(1) 溝状遺構 遺物出土状態



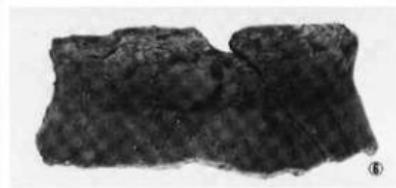
②



④



⑤



⑥

2~5 SK-3, 3層上面 6 SK-6



豊中市文化財調査報告第19集  
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1987年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係

印刷 やまかつ株式会社